

怪盗と聖女

ノット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある怪盗とオルレアンの乙女との日常。

目次

過去編

プロローグ	1
第1話	6
第2話	12
第3話	19
第4話	23
第5話	27
第6話	30
第7話	39
第8話	43
第9話	51
第10話	55

番外編	
最終話	97
第20話	93
第19話	88
第18話	84
第17話	81
第16話	78
第15話	74
第14話	71
第13話	68
第12話	64
第11話	60
クリスマス	105

第4話	144
第3話	141
第2話	137
第1話	133
プロローグ	129
Fate/Apocrypha	
バレンタイン	124
119	
プリズマ☆イリヤ	
I F	
3話	
113	
プリズマ☆イリヤ	
I F	
2話	
110	
プリズマ☆イリヤ	
I F	
1話	

過去編

プロローグ

巷で噂になつている人物がいる。

曰く、貴族から金目のものを偷み市井にばらまいている。

曰く、誰も顔を見ることがない。

曰く、盗まれた貴族は家に入られたことすら気づかない。

貴族はそのものを疎ましく思い、市民はその者のおかげで生活が前より楽になつているのである種の尊敬を抱いていた。

貴族はすぐに手配書をだすが、誰も彼の名前を知らないので困つた彼らは仮の名をつけることにした。

怪盗キッドと。

一四三一年。

十六か十七あたりの少年とも青年とも呼べる彼はある手配書を見ていた。

初めはちよつとしたいやがらせをするだけだった。横暴な貴族が税金を釣り上げ、食物などの値段が高騰していた。

気配を消すことと、身のこなしには自信があつた彼は腹いせにその貴族の家に侵入し、溜め込んであつた財を市民のばらまいた。

豊かになつた。

ばらまいたお金をあげたという事もあるが、その貴族がまた盗まれるかもと思ひ悪いことをしなくなつたからだつた。

彼は誰かのためになつてゐる事を嬉しく思つた。

そして更に彼は悪いうわさがある貴族の家に侵入し、盗みを働く。

不正をしている貴族たちはいつ自分の所に來るのか不安に思ひ、手配書がはり出されることになる。

——素顔がわかつてないからまだ平気なんだけどね。

怪盗キッドとして活動しているときは、仮面をつけているので顔バレを心配する必要はない。しかし、彼は自分が指名手配されているという現状に少し憂鬱となつた。

彼は帰路につこうと、街の中を歩いていると辺りから皆同じ話題の話をしているのが

彼の耳に入る。

——異端審問裁判開始。

一部では聖女とも言われている、ジャンヌ・ダルクの異端審問が始まったらしいことを彼は町民の話に耳を傾けて知った。

自国のために戦ったにも関わらず、裁判が始まり更には処断されるかもしれない。そんな彼女を哀れに思いながらも彼は何もしなかった。

あれが発動されなかったら。

——またか。

彼の生まれ持った特異な能力。彼の脳裏にはある光景が広がった。

覆しようがないことはこの能力と付き合って来た彼は知っていた。

だが、あまりにも悲しい。戦って戦って戦って戦った。ただ、戦争が終わってほしいと願った彼女が火刑なんて事になってしまう。

脳裏に浮かんだ彼女の姿を思い出す。

彼はいつものようにフードと仮面をつけてジャンヌ・ダルクが監禁されている牢へと向かった。

ジャンヌ・ダルクの裁判はいまだ始まっていなかった。裁判を始めるのは良いが、ジャンヌを有罪とするに足る証拠がなかったからだ。しかし、いずれジャンヌは処刑されてしまう。故国フランスのために。国と国が本当の意味での戦争を回避するにはそれしかない。

ジャンヌは死ぬ事が怖いとは思わなかった。誰かの悪になるのも構わなかった。けれど、ジャンヌは何かを残すことができたのか、自分の起こした事に意味があったのかを知りたかった。

ジャンヌの幽閉されている檻があき、何者かが入ってきた。

イギリス人の兵であった。

「痛っ。やめて下さい」

イギリス人兵達はジャンヌの事を床に転がした。

ジャンヌと彼等では言語が違ったので、何を言っているのかをジャンヌが理解するとはなかったが、自分を見る目で何をしにここに来たのかを察してしまった。

「誰かいないのですか。助けて下さい」

出来る限りの大声で叫ぶが、誰も来る気配がない。

ジャンヌは辱められてしまうのを予感した。

ー主よ、どうして私にこんな試練を与えるのですか。

ジャンヌ初めて主に不信感を抱いた。こんな事をされなければいけない、これが運命なのだろうか、と。

しかし、これもジャンヌ自身がしてきたことに対する罰だと思おうと抵抗するのも駄目だと思い人形に徹しようとした。

心だけは純潔なままでいたかった。

服を引きちぎられ下着も取られようとした時、突然イギリス人兵達は昏倒した。状況を把握する為に恐怖で目を閉じていたジャンヌは何が起こったのか分からず、辺りを見渡す。

イギリス人兵の後ろにはフードと仮面をした者が立っていた。

そして、身につけていたローブをジャンヌの下着だけになってしまった体に被せて、彼はこうジャンヌに告げた。

「貴女を盗みに来ました」

これが怪盗キッドとジャンヌ・ダルクの初めての出会いだった。

第1話

突然現れた彼に驚き、そしてこの出来事を起こしたであろう目の前の人物にジャンヌは問いたです。

「貴方はいったい何者ですか？」

「初めまして。俺はカイン、カイン・ナトリウス。つて言っても分からないよね。巷では怪盗キッドと呼ばれています。どうぞお見知り置きを」

カインはそう告げると、ジャンヌの元まで歩きその体を持ち上げる。

「うっ！ 何するんですか」

何日も牢屋に入れられて疲れ切っているジャンヌには抵抗するだけの力がなかった。

ジャンヌは抱えられながらも強い視線をカインに向けて質問する。

「貴女を盗みに来たって言っただろ。運命っていう誰かが決めたものからね」

「何を言ってるんですか！ 私はここで裁判が始まるまで待たなければいけません」

「それで処刑が宣告されるとしても？」

「はい」

ジャンヌの力強い返事にカインは頭を悩ませる。

「貴女はここでは死んではいけない。まだ先を、世界を見るべきだ。だつて貴女自身はまだ何もやってないんだから」

「それはそうですが、主の啓示を受けた時からそんなものは捨てました。全てはフランスのために」

頑なに助かる事を拒否するジャンヌ。

「君がこのまま処刑されても百年戦争は終わらないだろうし、市民の暮らしも変わらな
い。君の死を嘆く者が増えるだけだよ」

「それでも私はここに残ります。私が見殺しにしてしまった兵士たちの為にも責任を果
たさなければいけません」

頭の固いジャンヌ・ダルクを見てカインはだんだん疲れてきた。

「責任はもう果たしているじゃないか。あんなに劣勢だったフランスが盛り返せたのは
貴女のお陰だし、占拠されていた領地もいくつか取り返したんだろう？ それに今回

の異端審問とは全く関係のない事だ！」

うつ、とジャンヌは口ごもった。ジャンヌには返す言葉が無かった。ジャンヌが受け
た主の啓示は「イングリランド軍を駆逐して王太子をランスへと連れて行きフランス王位
に就かしめよ」というものだ。これは既に果たされている。だから、ジャンヌはもう主
に縛られる必要はないと言つても過言ではない。

「君も本当は死にたくないはずだ」

ジャンヌはカインの目を見た。カインの目は純粹に自分に生きていてほしいと訴えかけているようにジャンヌには見えた。

「もう自由になるべきだ」

カインは返事を聞かずに外へと向かって走り出した。

人がいる方向へと向かい叫んだ。

「ジャンヌ・ダルクは怪盗キッドが頂いた。彼女の無罪が証明されるまでこの私が頂戴しておく!!」

そう言い残し、ジャンヌを抱いたままカインはフランスの街の上を跳んだ。

「ジル・ド・レエ卿に報告します。今から1時間前にジャンヌ・ダルクが怪盗キッドの手により脱走しました。未だ行方は分ならず」

ジルは報告を聞きながら心の内では、安堵していた。ジャンヌが死なずにすんだと。彼自身、ジャンヌには何の罪もない事を知っていたが彼の権力ではどうする事も出来ず、ただただ処刑を待つのみであった。

「怪盗キッドか。奴ならジャンヌを悪いようにはしないだろう。」

怪盗キッドと直接あったことはないが、悪徳貴族らから愚痴を聞かされているので人となりは知っていた。なので信用はしていないが処刑されるよりマシだと考え、一先ず安心した。

「……ありがとう」

ジルは誰にも聞かれないような声でキッドに礼を言った。

ジャンヌを抱えたまま馬かと思うほど速く走り続け、今はもう街から離れ深い森の中を歩いていった。

しばらく歩くと木が伐採されている平野に小さな家が立っていた。

「ここが僕の家だよ。いやこれからは君の家にもなるのかな？」

抱えていたジャンヌを下ろし、家の扉を開こうとした時カインは裾を掴まれた。

「どうしてここまでしてくれるんですか。あんな事までして。他人の私を助ける理由なんてないじゃないですか」

「確かに何でだろうね」

カインは顎に手を当てて考えはじめた。

「貴女の生き様が可哀想だったから？　救いたかったから？　運命に縛られて欲しく無かったから？　うーん、なんでだろうな」

カインは自分でも何故助けたのかの正確な理由は分からなかった。ただ、助けたいから助けた。カインの率直な気持ちはそれなのかもしれない。それを言うのは少し恥ずかしかつたので、カインは口を濁して、冗談を言う。

「貴女に心を盗まれたからかな……なんてね」

ジャンヌは口をポカンと開けていた。しかし、直ぐに冗談だと気づいたのか、顔を真っ赤にしてカインの事を叩いてきた。

納得していないジャンヌの様子を見て渋々、カインは言葉を紡ぐ。

「貴女は今までずつと頑張ってきた。このまま処刑になるなんてそんなのはあんまりだ。一人の人間として幸せに生きて欲しいと思ったから助けたのかもしれないね」

「だから、みんなが求める貴女はここで終わりだ。貴女はこれからはただのジャンヌとして生きてください」

最後はそう照れ臭そうに笑いながら言葉を締めくくりジャンヌに告げた。

「ありがとう、ごさいます」

ジャンヌはなぜか分からないが自然と目から涙が溢れてしまいながらそう、答えた。

彼の言葉が今まで重荷になっていたものを取り払ってくれたように感じたからなのか、ジャンヌは地面にへたり込んでしまった。

カインはジャンヌに手を差し伸べて言った。

「さて、ここからジャンヌの第二の生の始まりだ。ここから一緒に笑って、楽しく生きていこう」

「はい！」

彼女は笑ってカインの手をとった。

第2話

カインはジャンヌと一緒に寝ていた。

——どうしてこうなった。

それは遡ること数時間前。

柄にもなく恥ずかしい事を言ってしまったカインはジャンヌをリビングにあるソファに座らせ、そそくさと自分の部屋へと来ていた。

——家だから仮面はもう取って、ジャンヌにも服をもつてかないと。てきぱきと動き、再びリビングへ行く。

「えーつとジャンヌさん、服持って来たから隣の部屋で着替えてもらってもいいかな？」
「分かりました。それと私のことは呼び捨てで構いませんよ」

「分かった。ジャンヌと呼ばせてもらうよ」

ジャンヌは呼び捨てにされて恥ずかしかったので、顔を赤らめてしまった。そしてカインの腕から服をもぎとり隣の部屋へと無言で歩いて行ってしまった。

——そんなに気持ち悪い言い方だったかな？

ジャンヌが戻ってくるまでずっと考え続けるカインであった。

——恥ずかしい

ジャンヌは隣の部屋で人知れず恥ずかしがっていた。

名前を呼ばれただけがよく分からない恥ずかしさが彼女を襲っていた。

——男性だからでしょうか？

ジャンヌは今まで自分と関わりがあつた異性について考えはじめた。

まず思い浮かべるのはやはり銀の甲冑を着ていた男。

次に思い浮かべるのはまたもや……

そして最後に思い浮かべたのも、

——ジルしかないじゃないですか。

自分の交友関係の無さに軽くショックを受けながら着ていたローブを脱いで、もらった服に着替えるジャンヌだった。

着替え終わったジャンヌを待っていたのは何かを必死に考えながら料理をつくっていたカインだった。

「カインさん、服ありがとうございます。それと借りていたローブも」

未だに少し顔を赤くしつつローブを手渡す。

「僕のことカインって呼び捨てで構わないよ。そのローブはジャンヌにあげるよ。認識阻害の魔術をかけているから何かと便利だと思うし」

「すいません助かります。というか、カインって魔術使えるんですか?」

ジルから世界には魔術と呼ばれる、神秘を扱う人がいると何かの話で聞いてはいたが実際にあつたことがなかつたジャンヌは目の前の人物がそうだと微塵も思つていなかったので驚愕した。

「まあ少しだけね。そんなことより早く料理を食べようか。ジャンヌはずつと牢にいたから暖かいものは食べれてないでしょ?」

そう聞かぬや否や、きゆるると可愛らしい音がどこからか聞こえてきた。

「ゴホツゴホツ、そうですね早く食べましょう」

音をこまかすかのように、わざとらしく咳をしつつジャンヌは席についた。

——すごい食欲だったな

今後の食費を心配するレベルでジャンヌは食べまくった。

お腹が膨れた所為なのか少し眠そうにしている彼女が目の前にいる。

——まあ無理もないか

牢の中という気が張っている場所に長い間いて、兵士に暴行されそうになり、挙げ句の果てに抱えられてここまで来たので当然といえは当然である。

「さて、ジャンヌも眠そうだから魔術で作った簡易お風呂があるからささつと入つてもう寝ようか」

眠そうにしていた目をぱつちりと開きこちらにすり寄つて来た。「え！お風呂があるんですか？　あの温かいお湯を溜めてあるあのあれがですか？　もう何ヶ月も

入つてないのでさすがに入りたいと思つていたんですよ」

「ある、あるからちよつと離れて」

息が顔に当たるほど近くに來ていたジャンヌはその事を理解してすぐに離れ顔を赤らませながらお風呂があることに喜んでいた。

「ジャンヌは先にお風呂に入つておいて。玄関に一番近い扉から行けるから。僕は適当な寝巻きとタオルを取つてくるよ」

ジャンヌは上機嫌に歩いて行つた。

「お風呂ありがとうございました」

お風呂から出終わつたジャンヌは濡れたタオルを首から下げて戻つて來た。

年頃の男であるカインはいい感じに色つばいジャンヌを見て色々と思うところはあるが鋼の精神で耐える。

カインの持っていたシャツの胸の部分だけやけに強調されているなあなんてことは考えていない。

カインもその後風呂に入るが、お風呂場でも様々な葛藤があつたとかかなかつたとか……。

無事にお風呂からでてジャンヌに寝ようかと言おうとした時にカインは気づいた。

ベットが一つしかないという事実。

ここで「ベットが一つしかないんだ」なんて言おうものならジャンヌは絶対にベットを使わないだろう。

ー何も言わないのが吉かな。

ジャンヌには上手いことカインの部屋にあるベットを使ってもらい寝静まった後にカインもリビングで雑魚寝をした。

ーはずだったんだけどな。

目を開けたジャンヌがカインを見ていた。

ーちよつと怖い。

「えーつとこれはどういう状況なのかな？　夜這い？」

ちよつとぷりぷりしながらジャンヌは喋り出した。

「違います!!?　少し寝たらすぐに目が覚めてしまって水でも飲もうと思ってリビン

グに行ったら、カインが床で寝ていたんです。ビックリしました」

「それからそこで寝かせて置くのも悪いと思ったのでここまで運んで来ました。もう何で言ってくれなかったんですか」

「言ったらジャンヌはベット使おうとしないだろうなあって思ったし。疲れてるだろうからベットを使って欲しくて」

「まあ確かにそうですが……じゃあ一緒にこのまま寝ましょう。そしたら大丈夫です」

「いやいや、何も大丈夫じゃないから。イケナイコト起こっちゃうかもだし」
あわてて反論するが、

「いけないことするつもりなんですか……それに1人だと怖いですし」

「でも「もう眠いので寝ます。おやすみなさい」ええー？」

そう言った後すぐにジャンヌは寝てしまいカインも離れようとするが無意識のうちにジャンヌが服をつかんでいたらしく離れられず、結局緊張して眠ることなく朝を迎えるのであった。

ージャンヌよだが……。

なんてことを思いながら。

第3話

精神統一。

カインが毎朝やっている鍛錬の一つだ。

しかし、今日は些か集中できない。その原因は、

「ん〜」

ジャンヌ
彼女である。

今朝ベットからこつそりと抜け出そうとしたときに、運悪く彼女が起きてしまい、なぜか一緒にやりたいと言ってきたのだ。

ー言ってきたはずなんだけどな。

今まで熟睡はあまりできていなかったのか、そのぶんを取り返そうかと思えるほど眠っている。

もう終わりにして朝食にしたいのだが、あまりにも気持ちよささに眠っているので、起こしづらい。

こうしてもしようがないので頬をツンツンと叩いてみて反応を伺う。

ー柔らかい。ジャンヌの頬超柔らかい。

あまりにも気持ちよすぎて本筋から離れていくカイン。

親指と人差し指で掴むようにのばす。

終いには両手で頬を撫でくりまわした。

そんなことをすればさすがに寝ていても…

「えーと、カインどうしたんですか」

起きてしまっていた。

「べ、別に変なことは考えてないよよよ。起きないからしようがなく突いてただだ、ただだから」

「そうなんですか？　でも「そうそう。さあ朝ごはん作ろつか」はあ」

カインは逃げるように家へと入ってしまった。

ジャンヌもしぶしぶついていくのだった。

その日の夜、カインが眠った後頬をツンツンと触ったのはジャンヌだけの秘密である。

「そういえばジャンヌって料理作れるの？」

「す、少しだけなら」

ものすごく動揺している。

「そっか。じゃあ、サラダを作ってもらえるかな。あとはやっておくからさ」

「わ、分かりました」

何かすごい事に挑戦するような顔をしているジャンヌ。

カインは自分のことをしながらこっそりと覗いてみる。

「うん、大丈夫そうだな。」

カインは自分の作業に集中しようとしたが、その時隣からすごい音が聞こえてくる。

何か食材に恨みでもあるのだろうかと思うほど、叩きつけて切っていた。

力を入れすぎてせつかく、師匠からもらったまな板という物がかわいそうな事に

……。

「ジャンヌ、ナイフは人差し指をここにこうしてあと力を入れすぎかな？あまり力を入れなくてもこうスツとやれば綺麗にきれるよ」

説明しながらジャンヌの後ろからジャンヌの手に手を添えて、実践してみる。

「あのカイン。教えてくれるのはありがたいんですが……近いです」

「ごめん」

カインはすぐに元の位置に戻る。

「あつ」

ジャンヌは寂しさに声を上げた。

「どうしたの？」

「いえ、教えてくれてありがとうございます。私、料理得意じゃないので今後教えてください」

「うん。もちろんだよ」

——ジャンヌの手、小さかったな。

——カインの手、大きかったな。

似たような事を思いながら2人は料理を作っていた。

第4話

「そういえば、今日は何をするんですか？」

ジャンヌが食事をしながら聞いてきた。

「午前中は畑に水やりとかをして、午後はジャンヌの生活用品を買いに行こうかなと思ってるんだけどどうかな？」

「私の物なんて買わなくても構わないですよ」

「服はともかく下着とか必要だろうし。つけないってのは禁止だからね」

「そうですね。私は別につけなくても構わないのですが……」

「いやいやこつちが色々耐えれなくなるからやめて!!？」

しぶしぶながらジャンヌに納得してもらい午後は2人で買い物に行く事にした。

「さて、先ずは畑だけでもジャンヌは特に手伝わなくても大丈夫だよ？」

「いえ、お家に住まわせてもらっていますし、これくらいはやらせてください」

熱心に言ってくるのでカインは断れるはずもなく手伝わってもらうことにした。

「ふう。とりあえずひと段落かな」

汗を拭いながら一息つく。割と畑仕事は体力を消耗するので大変なの

だ

がジャンヌはどこことなく嬉しそうである。

「なんでそんなにニコニコしてるの?」

「なんだか、故郷を思い出して。懐かしいなと思っていました。昔もこうして親の手伝いをしていましたから」

「そっか。もしき、故郷に帰れるとしたら帰りたいたい?」

「いえ。帰れたとしても、もうそこには私の居場所はないでしょうし……。あなただけに恩返しをしたいです」

「最後の方なんて言った? よく聞こえなかったんだけど」

「いえ、と、とりあえず故郷には帰りません」

なにやらあわあわとしているジャンヌ。

「ジャンヌの今後についても考えないとな。僕が誘拐したってことになってるから、僕のそばにずっといてほしいっていうのが本音なんだけど」

「ん?! そ、それって」

プシュとジャンヌの頭から煙が出た。

そして、倒れた。

「じゃ、ジャンヌ!!? 大丈夫☒」

カインは慌てて家まで運ぶのだった。

とりあえず、ジャンヌをベットまで運び濡れタオルをおでこにつける。

「ジャンヌ、大丈夫？　ごめん、無理してたのに気づいてあげられなくて」

「すみません。少しビツクリしただけなので大丈夫です」

実際、まだ顔は赤いが先ほどよりは大分落ち着いてきている。

「無理しすぎないようにね？　まだ体力も回復してないだろうし」

カインは自分の発言でジャンヌが倒れたことに気づきもしない。

そのことにジャンヌは少し不機嫌になりかけるが、心配してくれているので怒るに怒れない。

「この後、出かけるのはやめておこっか？」

「そうですね」と言おうとしたときにジャンヌは気がついた。

「ーこれって所謂デートなのでは？」

二人きり、買い物。しかも少し気になっているかもしれない相手と行ける。彼女の選択肢は決まっていた。

「いえいえいえ。体はなんともないので行けます!!？」

「でも、「行けます!!？」行こうか」

謎の迫力にカインは圧倒してついつい頷いてしまう。

一方、子供の頃から男の子と縁がなかったジャンヌは初デートに嬉しいのと恥ずかしいのが混ざり合ったような気持ちになっていた。

第5話

「さて、出かける前に僕はともかくジャンヌは手配書が出回ってるかもしれないから外見を変えようか。ずっとフードコートを着てるってわけにもいかないしね」

「変えると言っても……髪とかを切るんですか？」

ジャンヌは自分の髪の毛を触りながらたずねる。

「さすがにジャンヌの髪を切るのはもつたいないから、魔術で色とか長さとかを一時的に変えようかなって思ってるんだけど」

「分かりました」

「じゃあさっそく取り掛かるうか。どんなのにする？」

「カインが好きな髪型にして下さい」

「分かった」

カインはジャンヌの正面に立ってどんな髪型にしようかを考える。

女性の髪に触った事もないカインはドキドキしながら魔術をかけていく。

「このくらいまで短くしてみただけどうかな？」

かなり長かった髪を肩より少し上の方まで短くした。所謂ショートカットというや

つである。

「普段とは違うけどこのジャンヌもいいね、うんうん」

なんてことをぼろつとカインは口に出して言った。

ーうえっ☒

ジャンヌは突然褒められて、なんだか嬉しいというより恥ずかしかった。

「んじや髪の毛の色は金のままだとさすがにバレそうだから、白とかはどうかな？」

「は、はい。それで大丈夫です」

ジャンヌはいまだ混乱中なので生返事を返すので精一杯である。

「よし、完成。帰ってきたらこの髪型は直せるから気にしなくて大丈夫だよ」

「あのカインは髪の毛、短い方が好きですか？」

カインはこの髪型にしたのは短い方が好きだからなのかと思ったが、違った答えが返ってきた。

「いや特に髪型の好き嫌いはないんだけど、ショートカットの方が元気が良さそうっていうか、そんなジャンヌも見えてみたいって思ったからなんだけど。もちろんロングも似合ってるよ」

ジャンヌは微笑みながら納得する。

「ふふふ。子供の頃は長いのが嫌いでのこのくらいにして泥だらけになりながら遊んだも

のです」

「意外だな。あんまり想像ができないや。なんか、家で勉強をずっとしてて教会で祈ってるイメージしかないや」

「そんなことないですよ。私、勉強はあまり好きじゃありません。どっちかと言うと、力で押すタイプなので」

と言いながら自分の腕に力こぶを作っけて見せてくる。

カインにはぶにぶにしてそうという感想しか出てこなかった。

「ジャンヌのこと全然知らないんだなって改めて思うよ。まあ会って二日目だから当然といえば当然なんだけど」

「それは私ですよ。もっとカインの事を教えて下さい。あなたの事を知りたいです」

「僕もジャンヌのこともっと知りたいな。ジャンヌは魔女なんかじゃないんだって証明するためにね」

微妙に話があつていないことにジャンヌは気づき、少しショックを受ける。

「なんか話がずれたけど面白い物に行こうか」

「はい。デー……じゃなかった、買い物に行きましょう!!?」

第6話

街まではかなりの距離があるのでジャンヌをおんぶしながら移動しているのだが、カインは走りづらくてしようがなかった。

なぜかというところ……。

ジャンヌの胸のせいである。

一般的なサイズよりかなり大きい彼女の物は背中に心地よい感触を与えてくれるのだが、それにより前かがみになりそうになるカインなのである。別にこれはジャンヌをそういう目で見ていたりとかではなく男の生理現象なのであるが、ここでジャンヌに向かつて「あたっててるから胸を浮かして」なんて恥ずかしくて言えるわけもない。

そんな悶々としているカインであるが、一方でジャンヌはカインの体にしがみついて落ちないようにギュツとしている。

……ように見せかけてカインの匂いを嗅いでいた。
その時のジャンヌの顔はともではないが他人には見せられない顔であった。

「ふう、やっとついたね」

色々な緊張状態から解き放たれたカインはとても嬉しそうである。

「はい」

もう少し匂いを嗅いでいたかったジャンヌは少し名残惜しそうにカインの首筋を見ていたが。

「さて、まずは服から買おうか。そこに女性服を売っている店があるから、僕は店の前で待ってるね」

「え？ カインも一緒に入るんですよ。2人で選びましょうよ」

「え？ いやいや、女性しかいないから僕には……」

言い終わる前に、ジャンヌはカインの手をつかんで無理やり店の中へと連れ込んで

いった。

「こつちもいいなあ、あつちも無難だしなー、カインはどつちがいいですか？」
「そつちかな？」

こんなやり取りをすでに一時間以上繰り返していた。

カインは十五分くらいだろうと思っていたがそんな短時間で終わるわけもなく、街に来て早々疲れ切っていた。

女の子の買い物は長いものである。

そんなカインを見たからなのか、ジャンヌはとりあえず決めたものを持って試着室に入って行っていった。

ジャンヌが試着室に入っている間、カインはそこらにある女性服を軽く見ている。

ーこれジャンヌに似合いそうだな。

そんなことを思っていると試着室のカーテンが開いた。

「カイン、どうでしょうか？」

下はシヨートパンツにニーソックスをはいていて、上は肩が丸見えのシャツに上着をきているジャンヌが現れた。

「えっと、綺麗です」

カインは少し照れ臭そうに答えた。

「そうですか。よかった」

ジャンヌはなぜか安心したように笑ってから、カーテンを閉めようとしたので、

「ジャンヌ、これなんてどうかな？」

自分が選んだ服を手渡す。

「これは？　もしかしてカインが選んでくれたんですか？」

「ジャンヌの綺麗な長髪に合うかなって思って選んで見たんだけど。あ、でも今は短髪だしやっぱやめておこっか」

「いえいえ、ぜひ着させてください」

言うやいなやすぐにカインの手から服を奪い取り、カーテンを閉めてしまった。

「ど、どうでしょうか？　少し可愛すぎませんかね？」

出てきたジャンヌはフリルが少しついた白いワンピースを着ていた。

「そんなことないよ。さっきの服みたいな綺麗系もよく似合ってるけど、可愛いのも

ジャンヌによく似合ってるよ。どこかのお嬢様みたいだ」

「あ、ありがとうございます。じゃあこれも一緒に買います」

試着を終えたジャンヌはさきほどの服2着を買って、先に着替えた方をその場で着替えて買い物続けることにした。

「さて、次はどうしよつか？」

「その、下着を買いたいんですが……」

「うえっ、下着か……。下着店にはさすがに入りたくないかな」

「あ、じゃあ店の前で待っていてください」

といつて店の前で待とうと思っていたら中から店員さんがでてきて、

「あら？　彼氏さんと下着選びにきたの？　ささ、入って入って！」

無理やりジャンヌと一緒に店に入れられてしまった。

その時ジャンヌは「まだ彼氏とかじゃないです。うんうん」なんてことを呟いていた。

ーうわつ、どこも見れない。

周りは下着、下着、下着。下着の店だから当たり前である。

幸いにも他のお客さんには彼女の付き添いのように思われているらしく冷たい目は向けられていない。

でも、居心地が良いものではない。

「ジャンヌ、やっぱり僕は外に出ているよ」

「え!?」 どうせなら、先ほどみたいに選んでください」

とんでもない答えが返ってきた。

「ええー、いやいや服はともかく下着なんて……」

「私とは違った観点からのものも欲しいので、選んでください!!?」

ジャンヌは力説してきたので、つついカインは「うん」と返事をしてしまいジャンヌは嬉しそうに下着を選びに行ってしまった。

ーどうしよう。

カインは生まれてから一度も女性の下着なんて選んだことがない。

むしろ、選んだことがある人なんているのだろうか。いや、いない。

こうして悩んでいてもしょうがないので、とりあえず置いてある下着をみてみるこ

にした。

いろんなタイプの物がある。

スタンダードのものから、これ下着じゃなくねというものまで。

具体的にいうと紐だ!!?

紐だ!!?

何着か見ていき、黒色の良い感じの下着を発見したのでそれをジャンヌに渡しに行こうと思ったのだが、周りにはジャンヌがいなかった。

「あれ? ジャンヌどこだろ?」

歩いていると、試着室の前にジャンヌが履いていた靴を見つけた。

「ジャンヌ、この中にいる?」

「はい、いますよ。どうしました?」

中から声だけが返ってきた。

「下着選んだんだけど、どうすればいいかな?」

そしたら中から手だけがでてきて

「着てみるので渡してください」

と言ってきたので手に下着を渡す。

「これは……」

なんて声が聞こえてくるが、何もこつちに言つてこないので大丈夫だろうと思いジャンヌが出てくるのを待っていた。

待つてから数分後、中から急にバチンという音がして「痛っ」というジャンヌの声が聞こえた。

「ジャンヌ、どうかした？大丈夫？」

中から返事が聞こえず、何かあったのかと思いカーテンを開けた。

上半身裸のジャンヌがいた。

「え？」

「え？」

固まる2人。

とまる時間。

事態を把握していったジャンヌはどんどん顔を赤くしていき、完全に再起動を果たしたジャンヌは胸を隠しながら、カインに向かって強烈なビンタをおみまいした。

第7話

「もう、お嫁に行けない」

下着を買ったジャンヌはそそくさと店を出て街を歩きながら呟いた。

カインはジャンヌの後ろを申し訳なさそうに、俯いている。

「ーまさか下着が弾け飛ぶなんて……予想以上に大きかったのが僕の誤算だった。

カインが持ってきたものをジャンヌが無理矢理つけようとしたので耐えられずに壊れてしまったのだ。そのときに下着についていた金具がジャンヌの体にあたり突然の痛みに声をあげたのでカインはカーテンを開けてしまったというわけだ。

「ーこれは全面的に僕が悪いな。

「ジャンヌ、本当にごめん。その突然のことだったからあまり見えなかったし……えつと、ごめんなさい」

カインが何を言おうともこの場面では言い訳にしか聞こえないが、とりあえず素直に謝る。

「いえ、私も突然叩いてしまつてすいませんでした。ビックリしたのでつい手が出てし

まいました」

「こつちが全面的にわるいから謝らないで」

そう言った後しばらくの間2人には会話がなく、街をブラブラと歩いた。

突然、ジャンヌが後ろにいるカインに振り返り頬を染めながら尋ねた。

「カインは本当に見てないんですよね」

「うん、見てないよ」

嘘である。

結構ハツキリと大きなもの2つを見てしまったが、ジャンヌに精神的ダメージを与えたくないのので嘘をついた、というのもそうだが、彼女に嫌われたくないという気持ちもカインにはあった。

「そうですか。分かりました。この件はあそこで売ってあるアイスを買ってくれたら水

に流します」

ジャンヌは笑いながら指で店を指し示す。

カインは一安心して、答えた。

「ありがとう。じゃ買ってくるよ」

歩いていくカインにジャンヌは後ろから声をかけた。

「あと、もしわたしがお嫁にいけなかったらカインがもらって下さいね」

カインはビツクリして後ろを振り返るが、小悪魔のように笑っているだけでジャンヌは何も言わなかった。

アイスを買って戻ったときには、いつも通りのジャンヌに戻っており先ほどのセリフは空耳だったのかとカインは決めつけ、テキパキとジャンヌに必要なものを買っていった。

帰り際に自分たちのことがどれだけ知られているかを知るために、カインがいつも情報を集めている場所に向かった。

やはりというべきなのか、そこには怪盗キツドの手配書が今までより多く貼られていた。そのことにカインは少しうんざりしたが今までも手配はされていたので多いか少ないかの違いかと思ひながら割り切った。

隣に貼つてあつた紙にはあることないこと書かれていた。

怪盗キツドは国に喧嘩を売る気だとか、イギリス兵を逃走中に皆殺しにした、キツドはフランスを滅ぼそうとしている、ジャンヌ・ダルクに恨みがあつたのではないかなどである。

「ただ単に助けたかつただけなんだけどな」

さんざんな書かれようにそんな言葉をもらす。

「ひどいです。カインはただ私のために」

目に涙を溜めているジャンヌの肩に手を置く。

「本当のことを分かつてる人がちゃんといふから僕はこんなの気にしてないよ。それに、君が笑つて生きてくれてるのが僕にとってなにより嬉しいことなんだ。だから、気にしないで」

そんなことを言いながらジャンヌの涙を拭う。

ジャンヌはくすぐつたそうに笑ひ、それを見てカインも笑つたのだつた。

第8話

「ジャンヌ、起きて起きて」

ジャンヌは肩を揺すられてだんだんと頭が覚醒していく。

「カイン? どうしたんですか。こんな朝早くに」

昨日は買い物と言う名のデートをして、その後は一緒に帰ってきた。寝る場所である騒動があつたが結局ベッドで二人一緒に寝ることになった。

——今日は何も予定がなかったはずなんですが。

「忘れちゃったの? 前を見てごらん」

「なん、ですか、これは」

たくさんの衛兵がジャンヌのことを取り囲んでいた。

「ジャンヌを迎えにきてくれたんだよ。さあ帰れ」

カインは悪い笑みを浮かべながらそう告げた。

「そんな、そんなことって……貴方は私を助けてくれたんじや」
目から涙が止まらない。

「そんなわけないだろ。お前みたいな魔女誰が助けてやるかよ」

「ー苦しい苦しい生活がやっと終わったと思った。」

「ー私はもう自由なんだって思ったのに……」

カインはジャンヌに背を向けて歩き出す。

「待つて、待つてよ。私をおいていかないで」

必死にカインへと手を伸ばすが、ついでに手は届かなかった。

「カイン!!?」

「どうしたの？ ジャンヌ起きるの早すぎだよ」

ジャンヌはようやくくつきまでのことは夢だったと理解した。

「はあ。いえ、何でもありません。カインはこんな時間から何をやっているんですか？」

自分の目の前で荷物を整理しているカインを見ながら尋ねた。

「ーまさか、あの夢の通りに。」

「何って準備だよ。忘れちゃったの？」

ジャンヌには身に覚えがない。一瞬、本気で逃げ出そうと思いきり臨戦態勢に入った。

「一緒に海に行くってジャンヌが言ったんじゃないか」

「ーえ？」

「昨日、ごはん食べてる時に海に行きたいって子供みたいにゴネてきたから気分転換に

いいかかって思ったから行くことにしたんじゃないか」

昨夜あったことを思いだしてみようとするが、

「昨日はお酒を飲んでそれから……記憶がないです」

久しぶりに飲んでみたから、記憶がないほどペロペロに酔っていたらしい。

そして、ようやくジャンヌは自分の思い過ぎだと気付いたと同時に情けなくなつた。

自分を助けてくれた、何のメリットもないのに。そんなカインの事を夢を見たぐらいで疑ってしまった。

ジャンヌは自責の念に押しつぶされそうになり、目から涙を零す。

「ジャンヌ!?」

ジャンヌは泣いている自分を見てカインが慌ててあやそうとしているのが見え、更に泣くのだった。

「つまり、怖い夢を見たって事だね」

「全然違います！ 私の話を聞いてたんですか？」

カインの事を疑ってしまったん

ですよ」

「んー。よくある事だよ。溺れてる夢を見て起きてたら足をバタつかせ続けていたみたいな。条件反射ってやつだよ、きつと。それに僕と君は会ってまだ三日目なんだし、完全に信用しろって言う方が無理ってものだよ」

「でもでも」

「でももへチマもない。僕が気にしないって言ってるんだから気にしない」

ジャンヌはまだ少し気にしてるっぽい顔をしていた。

「じゃあ、今日の朝ごはんはジャンヌが作ってくれたら許してあげようじゃないか」

ニヤツとしながらジャンヌに条件を言ってみる。

悲壮としていた顔から一転、やる気に満ち溢れた顔へとなっていた。

「が、がんばります!!？」

すぐさま台所へと行ってしまった。

「さて、朝食までに準備終わらせておこうと」

荷物の整理が終わり、リビングへと向かった。

ジャンヌは台所で悪戦苦闘していた。

「手がないよ。」

「火が天井まで届いたんだけど」

「ひよ〜！」

カインもそれを見て悪戦苦闘していた。

「出来ました」

「おっ」

とても料理初心者には見えない物が並んでいた。

「あれ？ジャンヌ自分の分は？」

「ちよつと失敗してしまってその分を食べたのでお腹いっぱいなんです」

確かにこの量以上の卵の殻が捨ててあるのがみえる。

「うん。美味しい」

「味付けは大丈夫ですか？」

「僕はもう少し甘い方が好きかな。でも美味しいよ」

黙々とカインはジャンヌが作ってくれた料理を食べる。

ジャンヌはそれを嬉しそうに見ていた。

カインは朝食を食べ終わった後、数日は帰ってこない予定なので畑に毎日水をやれるように魔術でその仕掛けを作りにいき、ジャンヌはカインが食べた皿の片付けの担当になった。

「あれ？　フライパンに少し作ったものが余ってる」

捨てるのは勿体無いのでそれを口に運ぶ。

——しょっぱい。

ただただ、しょっぱかった。

なんの手違いか、塩を入れすぎてしまったらしい。

ーあれ？ でも、カインは普通に食べていたような。

カインに出したものは今ジャンヌが食べたものと同じはずなので、カインもしょっぱいものを食べていたはずだ。

ーうう。

カインは恐らくジャンヌを氣遣って何も言わなかったのだろう。

そんなカインに申し訳なく思うのと同時に、そんな人を疑ったのが恥ずかしくなつた。

ジャンヌは料理をうまく作れるようになることと、カインを絶対に裏切らないことをここで一人誓った。

第9話

カインとジャンヌが住んでいるのはルーアンという名の街である。

ここから海に向かうとなると近いのはイギリス方面にある北海である。

しかし、今が戦時中ということやイギリス兵にあまり良い印象がジャンヌにないということを踏まえて二人は地中海へと旅行する事にした。

本来は、ジャンヌの酔っていた時の気まぐれで海に行こうという話であったがジャンヌもキッドも指名手配されているということもありちよつとした息抜きをすることにした。

ジャンヌにはいっていないがカインは海を見たことがないと酔いながら言っていたので見せてあげたいという理由もあった。

旅行にでてから今日で一週間。

カイン一人であるならば走って一日でつけるがジャンヌを運びながらだと重いー彼女に言ったらしばき倒されそうであるーのと、ゆっくりと景色を楽しみたいという

理由から時間がかかった。

「おぉー、これが海ですか!!?　　すごいです。青いですよカイン!!?」

興奮気味にカインに詰め寄る。

それをなんとかあやししながら、宿へと向かう。

部屋を二つとりたかったのだが、ジャンヌがそれを自分のせいでお金がかかるのは申し訳ないという理由で断り、一部屋しかとれなかった。

その時、ジャンヌはとても嬉しそうな顔——この前のように認識障害の魔術をかけている（カインにはいつものジャンヌのように見えているが）——を——をしていて、宿屋の主人はそれを見てニヤケていた。

当然ながらカインは気づいていない。

ジャンヌはカインからもらったワンピースを着て浜辺に来ていた。

「カイン、カイン!!?　　水が冷たいです!!?」

彼女は足だけ海に入れてはしやぎ回っていた。

「ほりゃー！」

カインは後ろを向いていたジャンヌにむけて水をかける。

「きやつ!!? カ〜イ〜ン〜」

ジャンヌもお返しにと水をかけ返してきた。

「うわー、冷たっ!!?」

「それはこっちのセリフですよ!!? びしょ濡れになっちゃったじゃないですか!!」

「？」

せつかく着てきたワンピースも濡れてしまいうつすらと下着が見えてしまっている。

「そうだ！ 師匠が海に入るのに役に立つ服をくれたんだっつ」

「師匠って魔術のですか？」

「そうそう。なんかいろいろ規格外の人でね、色んなものを作ってくれてそれをもらっただんだ」

カインは荷物をゴソゴソとあさり、何着かの服を取り出した。

「確か……これこれ。水に濡れずに弾いてくれる素材でできてるんだって。どれ着る？」

カインが取り出したものは4着あった。

一つは男物である膝まであるパンツタイプのもので、

残りは全て女性もので、

黒い上下の下着のようなもの。

紺色の上下繋がっているもの。

布面積がないひものようなもの。

第10話

「これしかないんですか……」

「とりあえずもらったのはこれだけだよ」

ジャンヌはひものような服を持ちながら言葉を発した。

「これだけは無理です。丸見えじゃないですか!!？」 破廉恥です!!？」

「んじやあ残りのどっちか？」

「そうですね。着ないという選択もありますが、海に潜つても平気な服というのも着て見たいですし……」

ジャンヌは残り2つを見ながら考える。

――布面積という面から考えると紺色の方が着やすそうです……

「こっちの紺色の方は何故だか胸の小さい人が着るイメージがあるので、黒い方を着て見たいと思います」

「ー、ジャンヌが着ても似合いそうだけどな。うんうん
そんなことを思いながら着た姿をカインは妄想する。

ジャンヌはそんなカインを首を傾げながら見た後、岩場の陰に隠れるように着替えに行った。

カインはささつとその場でパンツだけを履く。

「えっと、どうでしょうか?」

ジャンヌは少し恥ずかしそうにしながらカインに訊ねてきた。

「な、なんていうか、ジャンヌの金髪に黒いのがよく映えてるっていうか、とにかくよく似合ってるよ」

「そうですか!!?」

それを聞いてジャンヌは嬉しそうに頬に紅をさした。

「さて、じゃあ遊ぼつか!」

カインはまだ上に着ていたシャツを脱いで上半身を露わにする。

「つつ!!?? 意外とすごい身体をしているんですね」

カインはゴツいというよりしなやかな筋肉をしており、服を着ているとあまり筋肉があるように見えず、所謂細マッチョというやつだった。

突然、そんな物を見た彼女は反射的に触ってしまった。

触ってしまった。

「ジャンヌ? 身体になんかついてた?」

ようやくジャンヌは自分がとんでもないことをしていることに気付き、お腹の辺りを触っていた手を引いた。

「む、虫がついていたので……」

苦しい言い訳だったが、

「そっか。ありがとう」

彼は気付きもしない。

そのことに色々ジャンヌは思うところがあつたが、今は初めての海を楽しむことにした。

「わあホントに濡れても平気なんですね!!?　　なんか不思議です」

「確かにね。ホントに師匠はすごいな!」

ジャンヌはふと疑問に思ったこと口に出した。

「カインの師匠ってどんな方なんですか?」

「どんなって言われてもな、すごいスパルタな人でね何回死にかけたことや。魔術もすごいんだけどそれ以外も恐ろしいレベルのひとだったよ。魔術の他にも槍術とか建築とか教えてもらったよ。懐かしいな」

「今はどこにいるんですか?」

「ちよつとすぐには行けないところかな?　　そんなことより……」

カインは海水を手で掬いながら両手を合わせて水鉄砲のように勢いよくジャンヌにかけた。

「今を楽しもつ!!?」

「はい!!?」

ジャンヌもお返しにと、カインの手を掴み勢いよく沖に向かって投げ飛ばした。

「やゝりゝすゝぎゝ！」

「死ゝゝゝぬゝゝゝ」

という言葉を出しながらとんでいき、海に吸い込まれるかのように着水した。

それを見てジャンヌはちよつとやりすぎたかなと少し反省しながら笑った。

第11話

「楽しかったです!!?」

あの後も三時間程海で遊んだ。

ジャンヌがカインを砂で埋めたり、ジャンヌが埋まっているカインに向けて棒を振り下ろしたり、カインが捕まえた魚をジャンヌが食べ尽くしたり……。

「とりあえず疲れた〜」

カインは散々な目にあいまくったので疲労困憊の様。

「ーまあ楽しんでもらえてよかったかな？」

カインはジャンヌに楽しんでもらえて、笑顔が見れて一先ず良かったという安堵感に包まれるのだった。

二人は元々着ていた服に着替えて、宿に戻ることにした。

「おや、お二人さんお帰り。えーつとカインさんとジャーニーさんだっけ？　海は綺麗だったろ？」

よくわからない名前を宿の主人に言われ、ジャンヌは首を傾げるがささずカインが肯定した。

「はい、そうです。とても綺麗でした。ここに住みたくなりました」

一言二言、主人と会話を交わし部屋へと向かった。

「カイン!!?　ジャーニーって誰ですか☒　浮気ですか☒」

ずんずんとカインに近寄り問い詰める。

後退りながらカインは答えた。

「ジャンヌの偽名だよ。ジャンヌ・ダルクっていう名前は今やフランスで知らない人はいないくらい有名だからさすがにまずいかなって思っただけ。というか僕たちそういう関係じゃないよね☒」

「ああ、そうでした。まだ違いましたね。

でもでも、宿に来た時ちゃんとジャンヌって名前でおじさんに頼んでいませんでしたか?」

「それは、ちよつとした魔術をかけてるからなんだよね。僕が発するジャンヌっていう

言葉をジャーニーって聞こえるようにしているんだ。僕とジャンヌ以外はね」

「そういうことですか。それならそうと言っておいてください。勘違いしてしまうじゃないですか」

恥ずかしそうにカインから目をそらすジャンヌ。

「ふふっ。そうだね、気をつけるよ」

機嫌を直した後、二人で話していたらうとうととジャンヌがし始めてしまったので寝ることにした。

ダブルベットで。

——なんでだ——！

海に行く前はちゃんとツインだったはずがダブルベットへと進化していた。

実は、ジャンヌがこっそりとツインからダブルへとしてもらうように頼んだのだった。もちろんカインは知らない。

ジャンヌに手を引かれて彼女に覆いかぶさるようにベットへと倒れた。
なんとかマウント状態からは逃れることはできたが手を掴んで寝てしまったジャンヌから離れることができずに朝日を迎えた。

翌日、目を覚まし宿の主人からの一言で二人とも顔を赤くした。
「昨夜はお楽しみでしたね」

「そんなことしてない(ません)!!?」
激しく否定したジャンヌとカインだった。

第12話

「んん、今日もいい天気ですね。今日は何をやりましょうか？」

「そうだなー、釣りでもしようか」

ジャンヌと同じく手を合わせて伸びをしながらカインは答えた。

「でも昨日も魚は食べたじゃないですか」

「昨日は僕が潜って取りに行っただけだからさ。釣りには釣りの楽しさがあるんだよ。さ、やろうやろう！」

カインにすすめられるがままジャンヌはやることにした。

二人は釣りがしやすい場所に移動し、竿を垂らし待つこと十分。

「つれません」

ジャンヌはそうそうに飽きていた。

「そりやすぐにはつれないよ。こうやって待っているのが楽しいんじゃないか」

「でもこうも釣れないとイライラしませんか？ 潜って捕まえに行きたいぐらいです！」

「それじゃあもう釣りじゃないね。」

ジャンヌの大胆さに少しひきながら、話を変えようと思ひ話題をふる。

「ジャンヌはさ、何かやりたい事ある？」

「突然どうしたんですか。やりたいことと言われましても……。こうやって二人で居られるだけで満足ですよ？」

カインは少し照れながら続ける。

「そ、そう？ もつと肉が食べたいとか、もつと魚が食べたいとか、甘いものがたくさん食べたいとかあるんじゃない？」

「なんで全部食べ物なんですか。私をなんだと思ってるんですか!!？」

ちよつとぷりぷりしながら突つ込むジャンヌ。

「しいていうなら、家族が欲しいです」

「つてことは結婚がしたいってこと？」

「まあそういうことですね。結婚して家で旦那さんと仲良くやって、子供を2人、男の子と女の子を1人ずつ欲しいですね。それでそれで男の子はヤンチャながらも優しくて女の子の方も元気いっぱいな子で、周りの奥様方からは「おしどり夫婦ですね」って言われる家庭が欲しいです」

ジャンヌのテンションの上がりように驚きながら頷くカイン。

「そっか、いい旦那さん探しのためにもジャンヌの罪を晴らさないとね」

「旦那になってほしい人ならもういるんだけどな」

「ん？　今「わあー、カイン!!」？　釣り竿に反応がありました！」お！　これは大物かも！」

ジャンヌは両手でしっかりと釣り竿をもって引き上げようとするが魚も逃げようとしているせいか力が拮抗している。

そこでジャンヌの背後に立ちカインも一緒に手伝うことに。

後ろから抱きつくような格好になってしまっているが今は大物がいるため気にしてられないカインだが、

——この抱きしめ方は……ヤバイです！

気にするひとが若干1名。

その後無事に釣り上げられたがジャンヌが熱中症？
ンだった。

になっ
てしま
い慌
てる
カイ

第13話

二人は沢山の事をした。

山に行った。

彼女は行ったことがなかったらしく、海と同じくらいはしゃいでいた。木に生えているキノコを食べれる事を知らなかったらしくその話を聞いた後から持つてきていた籠の中に至るところからキノコをむしり取り入れていた。

その後、彼だけ毒キノコにあたり彼女は半泣きになりながら慌てふためいた。

雨の日に彼が昔話をした。

彼女は雨がそんなに好きではないらしくその日は珍しく意気消沈していた。だからというわけではないが、彼は彼女に彼の冒険を話した。彼女は少年の様に目を輝かせながら話を聞いていた。その事を彼女に話したら彼は殴り飛ばされたらしい。

空を飛んだ。

正確にいうと落下なのかもしれない。二人はこの辺で一番高い場所から擬似的に魔力で翼を作つて飛んだ。彼女は始めは死ぬほど怖がつていたが段々と空の美しさに目を奪われていった。その後着水して二人はずぶ濡れになった。彼は服がすけすけに

なつた彼女を見て顔を赤らめ、彼女はその事に気付き彼は再び空を飛んだ。

本を読んだ。

この日も雨が降り暇な二人は本を読んだ。彼女は恋愛系の話が好きらしくむふむふにやけながら読んでいた。彼はその姿を微笑ましい顔をしながら見ていた。その後ポカポカ彼女に叩かれた。

散歩をした。

何気ない道。普通の天気。いつも通りだったけれど彼と彼女はお互いがいれば十分だった。どちらからだだっただろう。小指と小指がぶつかった。遠慮がちに手が近づいて二人の手は繋がった。顔を見合わせながら二人とも笑った。

怪談をした。

彼が実際に体験した霊との出会い、戦いを彼女に話した。彼女はなんて事ないように振舞っていたけど手がせわしく動いているのを彼は見逃していなかった。その日の夜は二人一緒に寝た。変な意味ではなくてただお互いが近くにいることが分かる距離で寝た。互いに互いを意識しあっていた。

街に出かけた。

彼女の服選びに彼は疲れ果てていた。女性の買い物に待つのは男の役目だと思いつみ彼は最後まで付き合った。彼は途中で小物屋に寄って彼女にプレゼントを買った。

明日彼女に想いを伝えるために。彼女も彼がいなくなった時に物を買に行った。彼にこれまでの「ありがとう」と「好き」を伝えたいために。二人は何事もなかったかのように一緒に家に帰った。お互いに買ったものは指輪だった。何故これなのかは特に意味はないと二人は言うだろう。

全ては明日のため。

次の日 ジャンヌ・ダルク 彼は捕まった。

第14話

運命は彼女を逃さない。

ジャンヌ・ダルクは火刑に処される。それは世界によって決められた決定事項。誰が何をしようともこの事実が覆ることはない。世界はあるべき真実へと収束する。いくら時間がかかろうとも彼女は観衆の前で火に炙られる。

それが彼女の運命^{fate}。

それでも彼は……。



カインは思考を止めることはなかった。

ジャンヌがどこからともなくやってきた兵士たちに捕らえられ、カインも彼女を隠していた事に対する罪で捕まった。捕まるのは彼女のなしてきた事から順当である。しかし、問題はそこではない。

カインが思考を続けている理由、彼等はどうしてここに來たのかという事だった。

カインの自宅は森の奥深くに位置しており、未だ嘗て誰もここに人が來たことがな

かった。それに加えて家を囲むように認識障害の魔術もかけている。仮に相手側にどれだけすぐれた魔術師がいても術を解く間カインが気づかないということはあり得ない。

それにぎつと見ただけで百人以上の兵が突然現れた。

以上の事からカインはこう結論づけた。

ー神、もしくは世界が力を貸している。

カインは現在ジャンヌと共に連行されている最中であるが、彼が本気を出せばこんな包囲網くらい簡単に抜け出すことが出来る。しかし、先の結論が正しいのだとしたらジャンヌを連れて逃げたとしても謎の力によってまた捕まってしまうのがオチだろう。

ジャンヌと出会う前にカインの異能が観測した未来ー火刑に処されるーを変えてはいけない。

今まで、カインは見てきた結果を変える事が出来ていなかった。カインが見てきたものは必ず現実で起こされてしまう。

いくら、努力してもその運命は変えられた事はない。

おそらくは絶対に変えられない。だが、カインにはそんなことは受け入れられるはずもなかった。

ージャンヌはただ皆を守りたかっただけなのに。ただ、それだけのために自らの手

も血で汚し、聖女という肩書きを押し付けられた。ただの村娘だった彼女にだ。どれだけ不安だったのだろう。突然神の啓示という一方的な物を押し付けられ、兵の命さえ彼女の手腕によつて如何様にもなる状況。

——暮らしていく内に僕はジャンヌが普通の女の子だと知ってしまった。料理もそんなに上手に作れない。そのくせ人並み以上に食べる。初めての事に対しては子供のように目を輝かせて夢中になった。あまりにも普通の女の子すぎた。そんなジャンヌに対する報酬が処刑だなんてあまりにも救われなさすぎる。

だからカインは考える。ジャンヌが生きてられる状況。カインの持ち札全てを使つてもジャンヌだけは生かす。それがカインの唯一の望みだった。それが彼女を盗んだ者としての意地でもあった。

——脳が千切れても構わない。何かあるはずだ。希望になり得る一手が。カインの思考は長かったのかそれとも短かったのか本人でも分からない早さで回っていた。そしてある一つの事に気がつく。

「世界を、騙す」

ジャンヌを救い出せるかもしれないという可能性を。

第15話

カイン・ナトリウスは生まれつき異質な目を持つていた。

右目は未来を見る目。

左目は未来を測定する目。

どこぞの爆弾魔のような能力を持っているように聞こえる。

しかし、それは勘違いだ。

彼の右目は彼が意図せず発動する。食べている最中や、鍛錬をしてる最中、寝ている最中でも勝手に発動してしまう。そして彼に未来を見せるのだ。見せる内容は時々によつて変わる。

リンゴがカインの頭に落ちる。

子供が井戸に落ちそうになる。

兵士が銃で撃たれる。

だが全てに共通することがある。

カインが見た未来は必ず起こるということだった。

ここで彼の左目の能力が関わってくる。

未来とはたった一つの行動によって結果は変わってしまう。例えば騎士王が選定の剣を抜いた世界と抜かなかった世界。

これは騎士王が抜いたからカインの世界の史実には騎士王や円卓の騎士の話が語り継がれている。

しかし抜かなかったとしたら……。カインの世界には騎士王なんて言葉は知られることすらない。

このように世界というのはたくさんの可能性を含む。

だが左目の未来測定。未来を見た後これもまた勝手に発動してしまうのだが、見た未来をそのまま固定してしまうのだ。つまり見た未来以外の可能性を全て潰してしまうという事である。

そこで思い出してもらいたい、カインがジャンヌの未来を見た事を。

カインはジャンヌが火刑に処される所を見てしまった。

見てしまったのだ。

未来は変えられない。

この能力の事をタイツ師匠に相談してから二人で色々実験してきたが結局、変える事はできなかつた。

それに今回は世界という力が彼女を殺そうとしている。カインの未来視と世界の強制力の二つ。各一つずつでも確実なものが二つもある。この絶対性を覆すことはできない。

――覆そうとしなければよかつた話だつた。

ジャンヌ・ダルクは火刑に処される。

これさえ守られていたらカインの未来視からも世界の強制力からも束縛を受けることなく行動することができる。

カインが見た正確な火刑の場面は彼女が高い柱に括り付けられ火に覆われていくというものだつた。

最低限、ここさえ合っていればカインの目による間接的妨害は防げる。

そして世界による強制力も周りの人々がジャンヌ・ダルクが死んだと思わせる事が出来れば働かないと見て間違いないだろう。世界はおそらく本来の史実であるジャンヌ・ダルク火刑という事実を曲げたくないのだろう。だがこれは絶対にジャンヌが死ぬということとイコールではない。

本来の史実ではジャンヌは火刑に処されて死亡しているという事だろう。

だが、史実とはどうやって紡がれているのだろうか。

それは人々によってである。

書物に書き残されたり、親から子へと話し聞かせるなどのやり方しかない。つまり、観衆が死んだと言ったら死んでいるということになる。これをクリアすると史実もまた変化を起こすことがないので世界からの強制力は終わりを迎える。

カインがするべき事は決まった。

観衆^{世界}を騙せ。ジャンヌ・ダルクが火刑に処されるといふ事を変えてはいけない。――僕の、いや俺^{キッド}はその為にいたのかも知れない。

彼らのショーが今始まる。

第16話

ジャンヌとカインは拘束されたまま最寄りの街であるルーアンへと連れていかれた。移動中はお互い話すことも出来ず、ただ黙つて歩くことしかしなかった。

兵士たちは始めはどこか呆けているような顔ぶりだったが街に近づくにつれてジャンヌ・ダルクを捕らえたという事実を知り驚愕したような顔を浮かべていた。これは恐らくだが、カインの家を包囲した時は彼等の意思が無かつた事をカインに教えてくれた。

ジャンヌはジル・ド・レエ卿を筆頭とした兵に連れていかれた。ジャンヌはカインと別れる際何かを伝えたような顔をしていたがそれを言える状況でもなく、カインは自分は大丈夫だからという意味を込めた微笑みしか出来なかつた。

ジャンヌはそれを見て泣き出しそうな顔をしたのだった。

カインは兵たちに連れられて駐屯地の地下にある牢屋に入れられた。入り口は鉄のドアで出来ており、他に脱出が出来そうな場所はなかつた。

カインはまず腕に嵌められていた手錠を魔術で身体を強化して無理に壊した。その

時かなり大きな音が出たが幸いなことに外にいるであろう兵士に気づかれることはなかった。カインは次にジャンヌやカイン自身のこれからについての情報を集め始めた。聴力を強化した耳をドアにつけて何か聞き取れないか試してみる。かなりドアが分厚いらしく魔術で強化してもなおカインはあまり話し声が聞き取れなかった。しかし、一番大事なことは聞き取ることが出来た。

——明日の十二時にジャンヌが処刑される。

異端審問はどうしたのかと突っ込みたくなったが上層部は、いや世界は早くジャンヌを殺したいらしい。なりふり構わなくなってきたな。カインはそんな事を考えながら悪態を吐く。処刑はおそらく火刑で、場所はルーアンにあるヴィエ・マルシェ広場で行われるだろう。現在は太陽がほぼ真上にあつたのをカインは確認していたのであと一日、時間があつた。ジャンヌの死亡を誤魔化す為にも一刻も早くここからカインは出たかった。そんな彼がドアを吹き飛ばすのに時間はかからなかった。出口ができた瞬間、風のような速さでカインはすでに駆け出していた。兵士達のどよめきが上がる前にカインは既に駐屯地を脱出していた。

カインはここでジャンヌのことを一回思い浮かべ、無事を確かめに行こうかと迷ったが彼女と親交があつたジル・ド・レエ卿が近くにいることを思い出し彼ならば彼女に手を出させるような状況にしないだろうと判断して一旦家へと準備をしに戻る事にした。

時間はいくらあっても足りないので行きは三時間かけて歩いた道も帰りは走って二十分で帰ってきた。

家にあつた魔力をこめてあつた物品を片っ端から袋に入れて、いつも着けている目だけ隠れる仮面を着けて再びルーアンに戻ろうと駆け出した。

直後、彼は召喚された。

「今回の標的は君かね」

抑止の守護者が。

第17話

「あなたは一体」

誰ですか？と言いたかったカインは言葉を止めざるを得なかった。目の前の相手がいきなり斬りかかってきたからだ。カインは槍を取り出し短剣を迎撃した。直後、距離を取る。

「あなたは一体誰ですか」

強めの口調でもう一度問う。その際もいつ攻撃されてもいいように警戒は怠らない。

「私かね。何、私はただの掃除屋だ。もしくはアーチャーとでも呼ぶがいい」

浅黒い肌をした男は自らをアーチャーと名乗った。

「それでアーチャーさんは俺に何のようですか」

「私の目的は君を殺す事だ。君が一体何をしようとしているのかは私には知らされていないが私がここに召喚されたということはおそらく人理の崩壊の可能性があるということなのだろう」

淡々とカインを殺すと説明するアーチャー。カインは会話の内容から目の前の相手は世界が派遣した自らを殺すための人物だと把握した。

「俺は一人の女の子を助けたいだけなんだ。ただそれだけなのに」

カインは本当にそれだけを望んでいた。

「……その女の子とやらはここで死ぬ運命なのだろう。何、君が気に病む事じゃない。人には出来ることと出来ないことがある。今回はたまたま出来なかったということの話だ。私も君みたいな善良な人間を殺したくはない。その子が死ぬまで私はここで君を見張らせてもらう。君がその子をどうしようしなかつたらアラヤも何も言わないだろうからな」

アーチャーはカインに同情したかのような顔をしてそう締めくくった。

「ーーだけど、でも、

「俺は、いや僕はそれでも助けに行きたいんだ」

「ーー見捨てるなんて出来ない、

「例えばそれで人理が、人類が滅びようともか？」

「ああ。僕は人類すべての命より彼ジャンヌ・ダルク女が大事だから」

「交渉決裂か。私がここに召喚されたのだからそんな気はしてたがな。ならば、人類のために私はお前という悪をここで殺す」

アーチャーは黒と白の短剣を構えた。

「あなたの方が正しいのかもしれない。一人を殺して全を救う。確かに間違っちゃいない。でも、あなたは、みんなは知らない。彼女は自分の心が悲鳴をあげてるのが分かりながらそれでも守りたかったもののために頑張れる人なんだって事。誰よりも人の命を尊く思い救おうとしてるんだって事。それを知ってて何もしないのが正しいっていうのなら俺は悪でいい」

カインも槍を両手で構える。

「行くぞ、正義の味方人類の守護者。俺の悪の正義のためにここでお前を倒す」

第18話

カインの槍の一撃をアーチャーが双剣を使い防ぐ。側から見たら目にも留まらぬ速さで動いている彼等のやってている事がこれだった。槍での変則的な動きに対してもギリギリのところまで反応し射程圏内から離脱され、剣を弾き飛ばしてもいつの間にか手には再び同じ剣を持つているアーチャー。お世辞にもアーチャーの身体能力は高いとは言えず素のカインの身体能力の方が高く、それに加えて魔術で身体能力を強化しながら戦っているので終始押しているのはカインの方だったがあと一歩のところまで毎回届かない。

このままでは埒があかないので、一旦お互いに距離をとり仕切り直した。

「いやはや、その若さでその槍の腕前。良い師が居たのだろうが、それでもなお恐るべき腕だ。私はおろか、魔槍で有名なクー・フリーンにすら匹敵し得る。君は所謂天才という奴なんだろうな。どんなに鍛えても二流止まりだった私からすれば羨ましい限りだよ」

「それを受け流してるそちらさんに言われても嬉しくないな。それと、あんたが二流なら世界中のほとんどの戦士が三流、四流になるよ」

話しながらもお互いに全く隙は見せない。

「だが、それでは私には敵わない。確かに槍捌きに関しては超一流と呼べるがそれだけだ。私が全神経を防御に集中すれば君の攻撃は防げなくもない。身体能力も敏捷さは私が見てきた中でも一、二を争うが反応できないというわけでもない」

正にカインも同じ事を考えていた。こうも攻撃がまともに当たらないと策を練らなくてはいけない。だが奴はアーチャー、つまり弓兵と名乗っておきながら双剣で戦っており、弓を使うそぶりも見せない。遠距離で魔術を使おうとしたらおそらく弓を使ってくるだろうがそしたらまた膠着状態になる恐れがあり、相手の弓の技量が高かったらカインはいずれ魔力が足りなくなりジリ貧となる。アーチャーはアラヤと呼ばれるものからバックアップを受けているらしく魔力の消費の心配をしなくていいときた。カインも今まで溜めてきた魔力があるからそこまで心配はしなくてもいいが、無限というわけでもない。

そして何よりカインには時間が無かった。アーチャーはカインを最低限足止めしておけば仕事は全うできるがカインはアーチャーを倒し、ジャンヌを助けださなければいけない。アーチャーと戦いのせいで、すでに日付は変わってしまった。あと十二時間。時間はあるようで無かった。相手は簡単に倒せる敵ではなくカインは徐々に精神的に追い詰められていた。

「付け加えて言うのならその槍、私のこの剣を平然と弾き飛ばしているのから察するにかなり頑丈に作られているが、魔槍ではない。因果逆転の呪いでも付いていたなら私は既に君に倒されていただろう」

どこぞの妖精から槍をもらったりするようなイベントは千四百年代には起こるはずもない。神秘など薄くなり過ぎていくのだから。

逆にアーチャーの剣は一見分らないが神秘の宿った武器、所謂宝具と呼ばれるものだった。そこまで神秘がこもってないとはいえ宝具であることに変わりはない。それをほんぽんと新しいものを使っているのを見るに分裂な能力を有しているか、かなりたくさん持っているか、アーチャー自身が作っているかのいずれかの事をしていて違くないかった。アーチャー自身が作っていた場合、他の宝具端的に例えるなら盾の宝具なんか持っていたならば最悪だった。カインに頑丈であろう盾の宝具を突破できる火力が出せないのだから。

カインは特異な目を持っているがそれも自身で発動できるタイプではないしもう一つの力も戦闘用というわけでもなかった。カインは自身の持ち札であるこれらを使ってアーチャーを倒すのを考えているが、かなり不利と言っている状況に追いやられていた。

カインは知らない事だがこの状況は偶然というわけではなかった。アーチャーは抑止力によつてここに召喚されているが、抑止力とは抹消すべき対象に合わせて規模を変えて出現し、絶対に勝てる数値で現れる。

初めからカインには勝機など存在しなかったのだ。

第19話

数えるのも馬鹿らしくなるほど武器を交えることによってお互い、通常の攻撃ではなかなか傷を負わなくなってきた。カインは常に槍の間合いに陣取るようにアーチャーに近づき猛攻。アーチャーはそれを防ぎながら後退しつつ空中で弓を投影して容易に接近させないように矢を放っている。どの矢も狙いはよく仕方なくカインは槍によって迎撃するしかない。

カインもアーチャーもこのままでは三日、四日は戦っていられるということに気づいてはいたが、アーチャーは敢えて何もせず時間が経つのを待ち、カインは状況を打開するための策を考えていた。

昨日の昼から戦い始めていたが未だ勝負はつかず、時刻はジャンヌ処刑の朝になっていた。

ここまでやって隙らしい隙を見せないアーチャーのことを倒すのにカインは一つの決心をした。

今までと同じように槍によって剣を弾き飛ばす。弾き飛ばした剣の数はもう千を超えていた。飛ばした後さつきまでなら追撃をしていたがここで一旦カインはアー

チャーと距離を取った。距離をとればとるほどアーチャーの矢の本数が増してくる。二度と近づかせはしないとばかりに撃ってきているがそれでもカインは下がり続けた。アーチャーとの距離が一キロ程空いたところでカインはようやく止まった。カインは止まったがアーチャーの矢は止まることはなくカインに迫ってきている。

その矢を撃ち落としながら貯蓄していた魔力の全てを槍に込めた。あまりの魔力に槍が悲鳴をあげていた。その魔力を込めた槍を持ち、カインは低い体勢をとった。直後、カインは消えた。

否、消えたのではなく常人には見ることでさえかなわない速さで一直線に走っていた。アーチャーは遠く離れていたのだから目で見えることができていたが、あの速度で走っているのをアーチャーは接近戦で対処できることはできないと即座に判断して一手うつ。

「I am the bone of my sword」
「カラドボルグ偽・螺旋剣」

一直線に来ると分かっているのならその射線上に自らが持つ渾身の一撃を放てばいい。そんな考えのもとこの宝具は放たれた。この矢はアーチャーが名剣カラドボルグを矢として使うために改造してあり威力はAランク宝具にも負けていない。

当たればタダでは済まないのは誰がみても明らかかな攻撃である。

カインはそれを見てもよけなかつた。

その代わりと言わんばかりに持つていた槍をアーチャーに向けて全力で投擲した。今までの速力に加えて走りながら全力で投擲した槍は宝具ではないとはとても信じられない威力を内包したまま真つ直ぐに飛んでいった。宝具のランクでいうと対軍、下手したら対城宝具はあるだろう。

槍と螺旋剣はお互いに当たることにはなかつたがどちらも威力が凄まじくどちらも少しだけ軌道が変わつた。

けれど元々の威力が果てしなかつたためにどちらも当たらないという程軌道はずれてはいなかつた。

アーチャーは槍が放たれた瞬間にカインがしたい事を理解した。

アーチャー相打ち。

どうしてこういう発想に至つたかは定かではないがそうとしか考えられなかつた。

距離が離れて見えない速度で迫ったらアーチャーが強力な宝具を撃つことにかけての
だろう。そしてその宝具を撃ち終わった後に隙ができることを願って。アーチャーに
とっては不幸なことにはかけは当たった。

咄嗟にアーチャーは自らが最も信頼している守りを展開させる。

「熾天覆う七つの円環」

アーチャーの前方に光でできた七つの花卉が展開される。

はずだった。

突然、槍を投げるといったカインの奇行に反応したアーチャーは流石といえるが、そ
れでも遅かった。

槍の速度は時速二千キロメートルを超えていた。

一つ、二つ、三つ目の花卉が出来たと同時に槍は盾に衝突していた。

不完全な盾では勢いを殺すことは出来ず、すぐに花卉は全て割れる。

アーチャーは槍が突き刺さる直前、敵がどうなったかに目をやった。

アー自らは標的を殺すことができたのか。

「自分の正義を貫けたのか。」

カインは投げ終わった後即座に致命傷を避けようとしたのだろうが、あの速さで動いていて急に方向転換できなかつたのだろう。

左半身がねじ切れていた。

それを見てアーチャーはふつと笑みを浮かべて槍に吹き飛ばされた。

第20話

カインは直感的に分かっていた。

アー勝てない。

正確に言うならばカインの求めている条件内で勝てないだ。アーチャーを倒す方法は大きく分けて二つあった。

一つ目は単純なゴリ押しである。アーチャーの守りの剣は確かに巧かったが決して崩さない程ではなかった。けれど、半日やりあつて漸く癖が見えてきたというレベルだった。あと半日あれば確実に仕留めていただろうがカインの目的はアーチャーの撃破ではなくてジャンヌの救出である。間に合うかどうかかなりギリギリになつてしまふ。そんな賭けに乗ることはカインには出来なかつた。

なので今回取つたのは強力な一撃で葬るという方法だつた。アーチャーがどんなに頑丈な防御宝具を持っていても突破できる威力を出せば勝てる。しかしこれにもいくつかデメリットがある。まず、アーチャーにも指摘されたがカインは宝具を持っていない。真名開放すればとんでもない威力を出せる宝具なんてものカインには無かつた。だがこれはルーン魔術を槍に使えば威力に関しては一クリア出来た。

問題なのはルーン魔術というのは派手なのだ。槍に付与すれば確かに威力は出るが、アーチャーの前であからさまに強そうな攻撃の準備を始めると相手は万全な守りをするのでそれを突破しなくてはならなくなる。アーチャーの守りがどんなものかをカインは知らなかったし魔力にもこちらは制限があるので無駄には出来ない。

だから今回はただの魔力を槍に込めることしかしなかった。そして盾を出すのを遅らせるために一直線に突撃という脳筋な戦法を取った。カインがあまりにも無防備になるのでここを見逃す事をアーチャーはしないだろうと判断してのことだが。案の定攻撃を放ってきたので相打ち覚悟でカインは槍を投擲する。ここで大事な相打ちというところだ。

カインは信じていた。

自身の実力をか？

――否。

アーチャーの実力をか？

――否。

――世界^{アラヤ}の性格の悪さをだ。

ジャンヌをありとあらゆる方法で火刑に処そうする奴がカインを生かしておくなんてするわけがない。召喚されたアーチャーがこんなにも戦いづらいのもそのせいだとカインは信じた。だからあるかどうか分からない盾の宝具の存在も信じたし、間に合うかどうか分からないという選択を真つ先に捨てることが出来た。

カインは世界を信じてるのだから。

カインがこの戦いでできる最善な勝ち方は相打ちだったのである。

しかし、相打ちでもカインの勝ちだった。

ルーン魔術というのは様々な効果の物がある。探知、遠見、硬化などルーン文字の組み合わせを使えばほとんどの事が出来るといっていいだろう。

そしてカインにルーン魔術を教えたのは誰であろうか。

おっぱいタイツで有名、ではなくて影の国の女王で有名なかのスカサハである。彼女が操るのは原初のルーン文字。とりわけ才能のあったカインもそれを教えてもらっていた。

カインにとって蘇生のルーンを作るのもそう難しいことでは無い。手間がかかりすぎるので率先して作ろうとも思わないが……。

左半身がアーチャーの宝具によって吹き飛ばされた瞬間にこの蘇生のルーンは発動した。死んだら蘇生するという失敗したら自分も死ぬというかなりリスクなルーンだったが日頃の行いのお陰か見事に蘇生することが出来た。もし、アーチャーの宝具がカインの頭に当たっていたのならもしかしたらルーンは発動しなかったかもしれない。そういう意味でも運が良かった。

欠損箇所も復元されていて魔力を殆ど使ったという以外は活動に支障はない。

なにより、一回一瞬とはいえカインは死んだ。これで、しばらくの間は世界もカインを死んだと誤認するだろう。

そのうちにカインはジャンヌを助ける。

タイムリミットまであと三時間。

最終話

その日は天が今にも泣き出す事を指し示すかの様な曇り模様だった。もうすぐ始まるジャンヌ・ダルク火刑を見るためにルーアンの街には人があふれていた。

その当事者であるジャンヌは腕を拘束されて、ジルと共にその時を待っていた。

「ジャンヌよ、私を恨んでください。これは私が無能であったために起こった事です。貴女はため祀られるべき存在になるはずだった」

ジルは目に涙を浮かべ、震えている手で自分の顔を隠す。

「いえ、貴方のせいではありませんよジル。全ては私が兵を率い、やらせてきた事です。これが私の運命だったのです」

ジャンヌは幼子をあやかすかのようにジルに話す。

「一つ心残りがあるなら私の事を保護してくれていた青年の事です。彼はどうなったのでしょうか」

「彼ならば捕まって少しした後にはドアを破壊して脱獄しました。その後彼を捜索したのですが、未だ見つかっていません」

「そうですか、良かった。彼は私がジャンヌ・ダルクだと知らずに世話をしてくれた善良

な一般人です。どうか彼の事を罪に問わないでもらいたい」

ジャンヌはカインのことを怪盗キッドだとは伝えず、あくまで偶然道に倒れていたジャンヌを保護してくれた一般人だと説明した。カインが無事なら。ジルは深く深く礼をした。それが了承の意味だったのか、謝罪の意味を込めたものなのかジャンヌには分からなかった。でも、ジルなら大丈夫と自分自身に言い聞かせ歩き始めた。

ジャンヌはカインに生きて欲しかった。

——好きになってしまった。愛してしまっただから。

ジャンヌにはそんな資格なんて無いのかもしれない。でも、心の奥深くから生じるこの衝動を抑えることなんてできなかった。

思い出すのは彼と過ごした日々。彼の隣はいつも温かかった。

——ぼかぼかしていついつい眠ってしまうところでした。

彼はわりと心配性だった。

——包丁くらい私でも一人で扱えますよ。

彼の横顔をみてる鼓動がはやくなる。

——そんなこと本人は知りもしないで……こっちの身にもなっただけほしいものです。

みんなに求められているジャンヌではなくてありのままにいられた。もしかしたら

ありえたかもしれない日々を過ごすことが出来た。

出来ることなら彼ともう一度だけ会いたかった。

——でも、来て欲しくない。離れるのが寂しくなるから。

そんな矛盾を抱えたまま処刑台へと歩き始めた。

彼はこれからどうなるのだろうか。素敵な女性と結婚して、子供が出来て、死ぬのだろうか。なんだか本当にそんな風になりそうなのが目に浮かび、カインらしいなど思い自然と笑みがこぼれた。

——ああ、でも結婚できるのが私ならな。

そう考えずにはいられないと同時にあり得ないなとも思ってしまう。

「この魔女め!!?」

「裁きを受けろ!!?」

ジャンヌに罵声を浴びせる人々。

でもなかには、十字架を持っていないジャンヌにそれをあげることのできる心優しい少女もいた。

ジャンヌの事を少しでも分かってくれる人がいる。それだけで彼女は救われた。自分がやって来たことの全ては無駄じゃないと分かったから。もう悔いはない。

丸太に体を縛り付けられる。

そして、ジャンヌの足下にある木々に火がつけられた。

火はだんだんと燃え移り始める。

神が怒っているかの様に火は燃え上がる。

近くの兵士はあまりの熱さの為に即座に離れる。民衆もまたしかり。

燃え上がった火はジャンヌを包み込んでいく。

主よ、この身を委ねます――

そして

「カインを永遠に愛しています」

「僕もジャンヌを永遠に愛するよ」

「——え？」

ジャンヌは閉じていた目をゆつくりと開けていく。

見慣れた姿。でも、服が破けていたり血が滲んでいたりする。それでもやっぱりジャンヌの知っているカインだった。

「——どうして。」

「神様にあげるくらいなら体も心も時間も僕に盗ませてくれないか」

「僕は盗つ人だから嫌だつて言つても盗んでいくよ」

カインはいつかの時と同じ様な顔で攫いに来てくれた。

来て欲しくなかったのに覚悟を決めたのに。ここで終わりだつて自分に言い聞かせたのに。

涙が止まらなかった。

「さて、そろそろ分厚い火でジャンヌが見えない事に疑問を思う人も出てくるだろうから早く逃げよっか」

「でも、どうやって」

「一先ず、ジャンヌと人形を入れ替えよう」

カインは身体の中から人形を取り出した。驚きすぎて声も出ないジャンヌだったがカインはそれを無視。手品の様にジャンヌと人形を入れ替えた。

余談であるがジャンヌそっくり人形はここに来るまでにカインが作った物で、見た目はもちろん中身もほぼ生身と同じである。

カインはジャンヌを抱き上げ空へと跳ぶ。

それと同時にジャンヌが縛られていた所の地面に設置していた魔術を発動させる。

木片が崩れる音。

それだけの魔術だった。火を燃やす用に木片が積み重なって、ジャンヌの足元には沢山あった。それを崩したかの様な音を出した。

ミスディレクションと呼ばれる視線誘導の技術だった。

一瞬だけ下を向かせることしか出来ない。でもその一瞬がカインには欲しかった。認識障害を使い、跳んでいる影ができない様に魔術を使う。そして観衆が視線を元に戻

した時には既にカインとジャンヌは屋根の上に着地していた。

ジャンヌを抱えたカインは火刑を見る事なく街の外へと走っていった。

何事もなかったかの様に火刑は進められた。

黒焦げになったジャンヌ人形を処刑執行者達は人々の前に晒す。さらにジャンヌ人形の遺体を誰の手にも入らない様に再び火をつけ、灰になるまで燃やされた。

灰になった遺体は処刑執行者達の手によってマチルダと呼ばれる橋の上からセーヌ川へと流された。

「さて、アラヤの抑止力が何もしてこないということはおそらく世間的にはジャンヌは死亡したと思う。本当の自由を手に入れたけどジャンヌは何がしたい？」

カインとジャンヌは手を繋ぎながら一緒に歩いていった。

「そうですね。じゃあーがしたいです!!？」

「えー!!？」 うーん。分かった」

おそるおそるカインはジャンヌの顔に手を当てる。そして、ジャンヌとカインの距離はゼロになった。

「ご馳走様でした」

照れまくっているカインに向けてジャンヌはいたずらっ子の様な顔をしてそう言った。

「そういえばカインは勘違いをしているので訂正しておきます」

「私の心は最初から貴方に盗まれていました」

ジャンヌは満面の笑みを浮かべた。

番外編

クリスマス

今日はキリストの降誕を祝う日。

つまるところクリスマスである。カインとジャンヌは例に漏れず、新居の中にクリスマスツリーやイルミネーションをしている。カインはなんだかんだクリスマスマスになにかをするということがなかったので、ジャンヌ指導の下飾り付けを行なっている。

ジャンヌは子供の頃、自らの家でやった事を思い出して少し感慨にふけていた。飾り付けが終わったら夜に食べる料理を作り始める。

この時代、未だ料理のレパートリーが少ないので些かクリスマスでも質素な食卓になつてしまう。しかし、年も終わる間近であり何よりジャンヌの嬉しそうな顔を見たいという一心で豪華に作る事を決めたカイン。

まず、適当に野菜と肉を切り水をはった鍋に投入し煮る。それぞれに火が通つたのを確認したら香辛料を入れる。ちなみに香辛料はめちやめちや高く手に入りづらいが、カインがルーン魔術で栽培しているのでここではその限りではない。

次にチーズを使ったオリジナル料理を作り始める。この間イタリアに滞在していた

時、初めて見た物をそのまま購入した。その名はマカロニという食べ物である。パスタの亜種のような物である。カインはまずマカロニを茹でる。その間にカインはのちにベシヤメルソースと呼ばれる物を作り始める。出来上がったら、鍋に牛乳を入れ温める。そこにソースや何やらを混ぜてとろみが出るまで混ぜる。とろみが出たらそこにマカロニやエビなどを入れて火が通るまで煮込む。それを皿にうつして興味深そうにこちらを見ているジャンヌの前に持つていく。最後に上からチーズをたくさん振りかける。そこでちよつとした魔術を使い外から火を入れて焦げ目がつくまでジャンヌに見せてもらう。いい匂いが漂ってくる。匂いのせいなのか、ジャンヌは女の子が口から出しちやいけないものをドバドバと垂らしていた。

その横に味付けをしていた肉を置き、これまた同じように中までしつかり火が通るよ
うに焼く。ジャンヌのお腹からすごい音が聞こえてくる。顔を真っ赤にしてチラチラ
とカインを見る。

「ー可愛すぎか!!?」

カインは内心絶叫しながら料理を盛り付ける。

「めちやめちや美味しいです。このチーズがのつてるやつも、お肉も。ヤバイですよカ
イン。毎日クリスマスがいいです!!?」

軽くおかしいテンションになりながらジャンヌは物凄い勢いで食べる。カインはそんなジャンヌを見て満足しながらゆっくり食べ始める。

「ふー、よく食べました。こんなに美味しい料理を食べたのは初めてです」

ジャンヌな自分のお腹をポンポンと叩きながらそんなことを言う。

「もうお腹いっぱいになっちゃった？まだデザートを用意してあるんだけど」

そんなことカインが言ったらジャンヌは目を輝かせながら

「甘いものは別腹です!!？」

なんてことを宣った。

カインはキツチンからまたもやジャンヌが見慣れない物を持つてきた。

「カイン、これは何ですか？すごく美味しそうであり太りそうな予感がする物ですね」

「ケーキをちよつと改良したものだ。ケーキつてちよつと固いけどこれはまあ色々やってふわふわの生地仕上がる風につけて、周りを牛乳から色々やってたら出来た物を甘くしてから塗った物なんだ。適当についたら出来ちゃった代物だけど、味はちゃんとしてるから安心して」

「甘々です。頬つぺたが落っこちちゃいそうですねよカイン!!？」

すごい早さで食べ終わるジャンヌ。

「お代わりはないんですか。もっと食べたいです！」

「あんまり体に良くないからこれしか作ってないんだ」

「えー、そんなー」

「もつとゆつくり食べればよかった」なんてつぶやいているジャンヌを見た後カインは自分のケーキを見る。

「僕のあと半分くらい残ってるから食べていいよ。甘すぎてこれ以上はキツイからさ」

「ホントですか!!?カインありがとう」

目を輝かせたジャンヌはカインの分を食べる。

残り一口となったところで皿に夢中になっていた顔をカインの方に向けてきた。

「そのすいません。私だけこんな食べちゃって。その、あと一口だけあるんで食べますか?」

「いや、大丈夫だよ。本当にお腹いっぱいだし」

「いや、乙女の沽券的な問題に関わるといふかなんというか。取り敢えず食べてくださいー!」

ジャンヌはフォークにケーキを刺してカインの口の方にもっていく。

「えつと食べるのは良いんだけど自分で食べれるからフォークを渡して」

「いえ、このまま口を開けて下さい。あーんというものをちよつとやってみたいので…」

あらぬ方向に目をやりながらポツとそんな事をジャンヌは呟いた。

「あーん」

顔を真っ赤にしているジャンヌ。

「あーん。うん、美味しい」

カインも少し照れながら、ケーキを食べた。

プリズマ☆イリヤ
I F 1話

「ー我 聖杯に願う」

「美遊がもう苦しまなくていい世界になりますように」

「やさしい人たちに会って…」

「笑いあえる友達を作って…」

「あたたかで」

「ささやかなー」

「幸せをつかめますように」

その言葉を最後に美遊はこの世界を出て、美遊自身が幸せになれる世界へと一人で旅立つ。

はずだった。

聖杯は最終工程が終わる直前、察知した。旅立たせる世界にも危険は潜んでいる。ゆえにこのまま移動させるだけでは苦しまなくていいという願いが叶わない。それは何でも叶える聖杯という沽券に關わる。そこで、聖杯は美遊を守ってくれる英霊を召喚することにした。衛宮 士郎のような誰か一人の事を守ってくれる英霊を。

美遊は冬木の柳洞寺大空洞で目を覚ました。辺りを見渡して自らの兄がいない事を確認し、自らが別の世界へと来た事を聡明な頭のおかげで分かってしまった。士郎の願いを無駄にしないためにも歩き出そう。そう美遊は決意した時に莫大な魔力を帯びた者が美遊の前に召喚された。

「召喚に応じ、参上した。君が守る対象かな？」

目の前の超常の存在にまったく反応する事ができず、美遊は呆然とする。

「おーい、君が美遊であつてるよね？」

自らの名前を呼ばれ美遊はようやくフリーズから立ち直り問い返す。

「なんで私の名前を知つてるの。…もしかしてエインズワース？」

美遊はもし自分の想像が当たつていたらこの状況ではどうする事も出来ないので、見た目とは裏腹にかなり焦つていた。

「エインズワース？つていうのはよく分からないな。俺は美遊つて子を守つて欲しいつ

ていう願いを叶えるために聖杯から送られてきた英霊。つていえば分かるかな？」

「確かにただの人間じゃないことは確かみたいだけど、敵じゃないかはその説明だけでは信用できない。何か証明してみて」

「証明って言ってもなあ。僕は逃れられない運命を背負わされている子を放っておけないから来ただけで証拠っていう証拠はないんだ。本来なら絶対命令権である令呪が君に宿るはずなんだけどそれも無いようだし。だから、信じられないならそれでも構わない。遠目から君を守ればいいだけの話だから」

美遊はその話を聞き、悩む。目の前の相手はほぼ確実に自分に危害を加える相手ではないという事は雰囲気と喋り方で伝わってきた。それが美遊が聖杯になりうるのか本当にただ単に守りたいというだけなのかは定かではないが。

その上で美遊は決断した。

「分かった、貴方の事を信じる。なんとなくだけとお兄ちゃんに似ているから」

そんな曖昧な理由で美遊は目の前の人物を信用することにした。

「良かった。じゃこれからよろしくマスター」

「マスターじゃなくて美遊でいい。それと貴方の名前は？」

英霊はちよつと困ったように指を額にあてる。

「名前か…。俺の真名は怪盗キッド。怪盗でもキッドでも好きなように呼んでくれ」

プリズマ☆イリヤ I F 2話

「さてとここにいてもしょうがないから移動しようか」

キッドは座り込んでいる美遊を見ながら提案した。

「っと、その前にその格好をどうにかしないとな」

キッドはどこからともなく毛布を取り出した。それを美遊に掛けてから彼女をおぶった。当然、美遊は慌てる。

「な、何するんですか!!?」

「流石に靴は持つてなかったから…美遊を裸足で歩かせるわけにもいかないし、ならおんぶしてあげよつかなみたいな」

「下ろしてください。自分で歩けます」

美遊は即座に異議を唱えたが

「却下」

取り付く暇もなく断られた。その後も美遊は下ろすように頼むがキッドは断固拒否をして結局そのまま美遊は背負われるままとなった。

キッドは道が分かっているかのようにスイスイと洞窟の出口まで進んで行き、そこか

らまた下山を始める。

美遊はキツドの背におぶさっていてふと思った。

——あつたかい。

体の体温がというわけではない。

キツドが醸し出している雰囲気というものがだ。この人なら大丈夫と思わせてくれる安心感がキツドにはあつた。それは似たような事を経験しているからなのか、それとも奥方と暮らす事で作られたのかは定かではないが。

——お父さんがいたらこんな感じなのかな。

美遊はそんな事を思いながら、キツドへの信頼を少し上昇させた。

そんな美遊の様子を分かっていたかのようなタイミングでキツドは美遊に話しかけた。

「なあ、美遊」

「な、なに？」

美遊は少し動揺する。

「今すれ違つた親子が俺の事を不審者を見るかのような目で見てただけだ。どうしたらいい」

美遊はキッドへの信頼を元に戻した。

しかし、これは美遊のせいでもある。ドレスの様な服に毛布をかけている少女が妙齡の男性に背負われているのだ。最早事件の匂いしかなかった。お巡りさんにお世話になる前になんとか状況を打破しなければとキッドは思つて美遊にこんな事を聞いた。

美遊もその事を聞き、自分の格好を思い出し顔を赤らめた。

二人は誰にも見つからないようにコソコソと移動を始める。下山し終わり、住宅街に入った。少し歩くとゴミ置場にまだ着れそうな服と靴があつたのでそれを美遊が身につけた。

背負われる事から解放され嬉しいような寂しいような気持ちに美遊はなりながら公園まで歩き、そこにあつたベンチに座つてこれからの事を相談し始めた。

「とりあえず、美遊のお兄さんの願いを叶えるにしても何にしても寢床と戸籍は必要になつてくるが、俺は既に死んでいるし美遊はこの世界の人間じゃないときた。さて、どうしようかね」

戸籍くらいなら魔術を使えば何とかなるつちやなるのだが、お金の持ち合わせがない

ので家は流石にどうにもできない。誰かさんの様な一般人を騙す様な事をキッドはいや、カインはしたくなかった。

また、外に出た事が少なかつた美遊にこれを打破することができると意見など持っているわけもなく、というかキッドはこういう事で美遊にはなから期待はしていない。

「とりあえずハローワークに行くか」とキッドが言おうとした時魔力を帯びた気配を察知した。と同時に霊体化する。

「え？キッド、何処に行つたの」

周りをオロオロし始めた美遊に念話を繋げる。

『何か魔力を帯びたものが近づいてくるから霊体化した。ちゃんと近くにいるから心配しなくても大丈夫』

人差し指だけ実体化して美遊の頬をぶにぶに押す。

「良かった。というか、何で霊体化するの？」

『俺というか、サーヴァントは現代の人間とは格が違うからそれなりに魔術に心得があるものからしたら俺はかなり警戒されるからかな。どうやって召喚されたのかとか色々面倒な事がおきる予感しかないから俺は基本的に美遊が一人の時しか実体化しない事にするよ』

美遊には言っていないが、通常、霊体化しても存在感は薄つすらと残つてしまう。だ

が、そこは師匠と並び立つ程の才を持つているキッド。ルーン魔術で気配を悟らせることをさせていない。

『もし、何とかなりそうな相手なら交渉を任せる』

『交渉つて。私、そんな事したことない』

『ああ、そんな難しく考えなくていいよ。自分が心から思っている事を言えばいいだけだよ。人を動かすものはいつだつてその人の心からの言葉つて相場は決まつてるよ』

そんな風におちやらけた言葉を最後にキッドとの念話は切れた。

と、同時に美遊は自らの相棒になるステッキと出会った。

その後、なんやかんやあり美遊は金髪ドリルと暮らす事になった。美遊・エーデルフェルトとして。

基本的に美遊とキッドは話す事は無い。というか出来ない。美遊の傍らには常に魔術礼装であるカレイドサファイアがいる。だから美遊とキッドが話すのは美遊が一人

になる寝る時だけと決めた。殆どは寝る前に念話で話す事になった。キツドは気配は感じられないが、着替えやお風呂など以外は常に美遊と共にいる。二人はその日の出来事を思い返しながら念話をする。

『メイド服か…彼女に着させてみたいな』

『彼女って誰?』

『ああ、俺の奥さん』

『え?!?結婚してるの!相手はどんな人?』

『そうだなー、強くて優しく真つ直ぐで、でもちよつとだけ脳筋だったり不器用だったり可愛い一面もあるそんな人かな』

『どつちから告白したの?』

『それは秘密。二人だけの思い出だからね』

美遊はちよつと残念がりながらもキツドの惚気話を夜遅くまで聞いた。

そんな事をしながら日には過ぎていき、キャスター討伐の日がやってきた。

プリズマ☆イリヤ I F 3話

午前零時、一分前。

「速攻ですわ。開始と同時に距離を詰め、一撃で仕留めなさい」

金髪ドリルこと、ルヴィアが美遊に命令する。

「はい」

美遊はそれに短く返答した。

『美遊、今回も前回のライダーみたいに上手くいくとは限らないから慎重にいこう』
霊体化したままキッドは美遊に注意を促す。

『わかった』

「いくわよ。3、2、1…」

遠坂 凜がカウントダウンを始める。

「限定次元反射炉形成！鏡界回廊一部反転！」

「ジャンプ接界」

『魔術障壁準備！』

移動してすぐに周りを見渡し、事態を把握したキッドは美遊に吠える様に告げた。

直後、空から雨の様に魔術が飛んでくる。いくらかの魔法使いによつて作られたカレイドステッキとはいえ、降ってくる魔術のレベルが高すぎるがゆえに魔法少女たる彼女達にもダメージがはいる。

しかし、即座に障壁を展開していた美遊はイリヤと比べると態勢が整っており反撃に移ることに成功する。

「砲射^{ショット}!!？」

だが、その攻撃は届くことなくサーヴァントの前で辺りに力が分散してしまった。

「なっ…弾いた☒」

「あれは、魔力指向制御平面☒」

現代の魔術師たる彼女らはこの規模で魔力を逸らす事ができるサーヴァントはおそらくキャスターに驚愕する。

その後、キャスターの攻撃の前に急いで逃げ出す四人だった。

『美遊、怪我はない？』

『大丈夫。だけど、あのキャスター結構やつかいかも』

少し考えてからキッドは自分が考えた方法をいくつか伝える。

『うーん、物理攻撃ならたぶん普通に通ると思うから俺が実体化できるなら一発なんだけどな…。それか、魔法陣の上から攻撃するとか?』

『まだルヴィアにもキッドの事説明してないから…。あんなに高くまで跳べない』

美遊はあんなに跳べないと否定するが、キッドはそれを否定した。

『いや、その礼装の力なら案外いけると思うよ』

『いやいや、そんなわけ…』

そんな念話を二人でしている最中、イリヤが空を飛んだ。

「え?」

美遊は目の前の事を信じられないのか普段の彼女らしくなく動揺する。

そんな会話をした後、今日は解散としてまた翌日の夜にキャスターに挑むことになった。

『ねえ、キッド』

その日の夜、ベッドで横になっていた美遊はキッドに話しかけた。

『どうかした?』

『人間って、道具無しで空飛べるの?』

一般人が聞いたら頭がおかしいと思うか、中二病なのかと思う発言である。

『まあ、魔術を使ったら出来なくもないと思うよ。でも、地表みたいに速く動く事が出来ないから、俺はそんなことしないで跳躍して相手を地面に叩き落とすっていう戦法をとるかな』

『で、どうやって?』

美遊はキツドに詳しく飛ぶ方法を聞く。だが、ここで問題が発生した。美遊は生まれはかなり特別であるが、魔術とは関わりがない世界で生きてきたので魔術云々と説明しても上手く教える事が出来なかった。

『というか、こんなに悩まなくても自分が飛んでるのを想像したらサファイアが力を貸してくれるから上手くいくと思うよ』

なんだか教えるのが面倒になったキツドは美遊にそんな呑気な事を言った。

『そうかな?』

美遊も今日は疲れていたので楽観的に考えて、眠りへとついた。

翌日、学校が終わった美遊はルヴィアに連れられて空の上にいた。

「…無理です」

「あなたなら飛べます！できると信じれば不可能などないのですわ！」
「いえ、やはりどう考えても無理ですっ……」

と言いつつたと同時に美遊は上空から飛び降りた。いや、正確にいうのなら飛び落とされた。

命綱なしで。

「……………!!?!?!?!」

美遊は色々なパニックによつて声も出なくなつた。

そんな美遊を見ながら、

「……こうしてるとただの子供に見えるなあ。

なんて呑気な事を考えるキッドであつた。

バレンタイン

「じゃ、ちよつと仕事してくる。帰るのは夜になるからお昼は先に食べておいて」

カインは仕事をしに出かけた。ジャンヌはカインの怪盗稼業に対して色々思うところはあつたが金を巻き上げている人にしかやらないという事と自分の手元には一切残さないという事をカインが説明した事によってカインはジャンヌの許しを得た。

というか今回はそんな事を考えている時間はジャンヌには無かつた。

猶予時間は残り十時間。カインが帰ってくるまでにモノを作らなければいけないからだ。

今日、二月十四日はバレンタイン。女性から好きな男性へと贈り物をする日だつた。ジャンヌも例外ではなく自らが愛する人へと贈り物をする予定である。

「うーん、何を作りましょう?」

余談ではあるが、バレンタインはチョココレートというのは日本だけである。外国では贈り物をするという感じである。付け加えていうのならこの時代にはチョココレートというものはこの地域にはまだ普及されていない。

余談終わり。

ジャンヌはカインにあげるモノの例をあげていく。

「食べ物系ですかね。でも、形に残る物も捨てがたいですね。それとも箱の中に私が入って私がプレゼントですって言うのもいいかもしれません！その後いい感じの雰囲気になってお持ち帰りされるパターンです!!？」

などなど後半からはテンションがおかしくなつて変な事を言っているがジャンヌができる贈り物というのはかなり限定される。新居はまたもや森の奥深くに建てられているので買い物など簡単には行けないし、行けたとしてもジャンヌの顔を知っている人に出会ったらマズイのでカインと一緒にいる時ぐらいにしか街には出かけない。

結局、ジャンヌは食べ物を作ることに決めた。自分がプレゼント作戦と最後まで悩んだが、今回は一般的な方を選んだ。

「食べ物、食べ物、食べ物かー何がいいんでしょうか。ケーキ作れたらケーキを作るのに…そうだ！クッキーを作りましょう」

漸く作る物を決めたジャンヌは調理に移った。

料理があまり得意では無いジャンヌは四苦八苦しながらそれでもカインのために一

生懸命作る。

顔が粉まみれになりながらもなんとかクッキーは完成した。

「ふう、完成しました！後はカインが帰ってくる前に「帰ってくる前に？」包んで：でええー!!？」

ジャンヌが驚きながら振り返るとそこにはクッキーを贈ろうとした人物が、というかカインが立っていた。

「結構前から家に帰ってただけでジャンヌ又作ってるのに集中し過ぎて気づかなかったんだよね」

「声かけてくださいよー」

ジャンヌは驚きすぎてへなへなと床に座り込んだ。

「ごめんごめん」なんていいながらジャンヌの頭を撫でるカイン。

「気持ちいい、じゃなかった。カイン！今日はバレンタインですね」

「バレンタイン？」

不思議そうに首を傾げるカイン。

「まさか知らないんですか！」

「街に行った時に聞いた気がするけど、具体的には何をやる日なの？」

「そ、それはですね。日頃の感謝を伝える日といいますが、愛を伝える日といいますが、

ううー／＼／＼

ジャンヌは改まってバレンタインという日の説明をするとなんだか自分がとても恥ずかしい事をしているような気分になった。

「つまりですね、貴方の事が大好きって伝える日です！」

半分、やけっぱちになりながらそういう締めるジャンヌ。

それを聞いたカインは

「そうか。そんな日があったんだ！」

「えっと、君の事が好きです」

なんてことを言い放った。

ジャンヌはそれを聞いてポカンとした後、言葉の意味を理解して顔を赤くした。

「違います！女性から言うものなんですよ。こういうのは!!？」

怒り照れ狂いながらポカポカとカインのことを叩くジャンヌ。

「カインが好き。大好き」

カインの胸に抱きつきながら囁くように告げる。

「そっか。お揃いだね」

「そのですね、カイン。せつかくのバレンタインなので、その夜のお誘いといいますが、なんと言いますか…」

「夜？なんかやるの？」

「…知らないんですか」

「??？」

「分かりました。私が受けに回ってたのが間違っていました。さあベッドに行きましょ

う

「??？」

次の日、すぐさまテクニックをマスターしたカインに骨抜きにされたジャンヌがいたとかいかなかったとか。

F a t e / A p o c r y p h a

プロローグ

相良 豹馬は詠唱を始めた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

ユグドミレニアムのマスターとして参戦するにあたって相良は自らの技量を考慮に入れた上でアサシンのサーヴァントを召喚することに決めていた。

「手向ける色は『黒』」

しかし、アサシンのサーヴァントというのは触媒を用いなければ基本的にはアサシンの語源になっている山の翁の中から選ばれる。だが山の翁は過去にも何度か召喚されており、ある程度の情報が残ってしまっていた。そこで、相良はある触媒を用いて山の翁以外のアサシンのサーヴァントを呼び出すことにした。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」
用いた触媒はジャック・ザ・リッパーが実際に使用したとされるナイフ。また、召喚の可能性を高めるためにジャック・ザ・リッパーの犯行現場を再現する。相良の足元にはそのために使う予定の女性が魔術で暗示をかけ逃さないようにして転がっていた。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

彼女の名前は六導 玲霞。玲霞はとにかく運が悪かったとしかいいようがない。たまたま相良という魔術師と出会ってしまい暗示をかけられ、彼の事を好きだと思わされ、金も取られ、命までも取られようとしている。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に」

玲霞は自分の人生を思い浮かべていた。玲霞の人生は今の状況と少し似ていた。幸せだった時間はすぐに終わり、それからは身をもつて金を稼ぎ生活していく人生。挙げ句の果てにはよくわからないやつに殺されそうになっている。

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

サーヴァント召喚の詠唱はもう少して終わるという事を玲霞はなんとなくだが悟っていた。そして、詠唱が終わる前に自分が殺されるといふ事も。分かっているながらも玲霞にはどうする事も出来なかったしするつもりもなかった。玲霞は生きることにより疲れていた。こんな世界生きていても良い事なんて一つもない。寧ろ、辛い事の方がたくさんある。ここで死んで楽になろう。

——本当にそれでいいの？

玲霞はどこからかそんな声が聞こえた様な気がした。中性的な声であるが、女性か男性かと聞かれたならば男性だと答える声だった。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

相良は犯行現場を再現するためにナイフを手に持ち玲霞の胸の上に照準を定める。玲霞はその様子を見て思ってしまった。

——死にたくない。

もう生きることには疲れている。それは本当だ。と玲霞自身そう思っていて生きてくなくとも思っていた。けれど、実際にナイフを見ていたら死ぬ事が怖くなってしまった。まだ自分は何もやれていない。こんな終わりでは本当に玲霞という人間が生まれてきたことに意味がない。

——まだ、死にたくない!!？

しかし、相良はナイフを持った手を振りかぶり玲霞の胸に突き入れようとする。玲霞は思わず目を瞑ってしまった。

一秒、二秒、三秒たつても玲霞に痛みはやってこなかった。玲霞はおそろおそろ目を

開ける。

「君が俺のマスターかな？」

第1話

玲霞は目の前に立っている人物を見る。目は仮面に隠されていて見え、どう見ても現代では着ないだろう服を着ていた。

——彼が召喚された人。

だんだんと普段の玲霞らしい思考力が戻ってきたと同時にその結論に至った。だが、それにしておかしいとも思っていた。召喚される予定だったのはジャック・ザ・リッパードと呼ばれるサーヴァントだと相良は口走っていた。玲霞はジャック・ザ・リッパードの詳しい情報を知っているわけではなかったが、相良からジャック・ザ・リッパードは女である可能性が高いと聞かされていた。少なくとも女性の油断を誘いやすいどちらかという中性的な男ならまだ納得ができた。

しかし、玲霞の目の前に立っているのは明らかに男性である。それに加えて、ジャック・ザ・リッパードの犯行の再現をしようとしていたはずなのに玲霞が生きている事自体不思議である。体をバラバラにしてようやく再現が完成する。それなのに玲霞は死にそうにはなったものの体には傷らしい傷はなかった。これらのことより玲霞は目の前の人物をこのように考察した。

ー ジャック・ザ・リツパーではないサーヴァント。

玲霞には何故違う人物が召喚されたかということとはよく分からなかった。一度目の失敗と同じく今回もまた相良の技量が足りずに失敗したのか、それともサーヴァント召喚に使った触媒が偽物だったのか。玲霞は頭の回転は早く、偶に人外じみたことを普通に実行できるような女ではあるが魔術の事はつい最近知ったばかりである。そんな彼女に結論を求めるのは間違っていた。

そこで、玲霞はようやく相良の存在を思い出した。実際に召喚しようとした彼はどこにいったのかと玲霞は思い、辺りを見渡してみる。

相良 豹馬は玲霞の後方にある壁に尻を突き出すような態勢でピクリとも動いてはいなかった。玲霞が遠目で見たところ生きているのか死んでいるのかは定かではない。召喚者に彼の事を聞きたかったという目論見は初めから頓挫した。

「聞こえているかな? マスター?」

召喚された人物が玲霞に声をかけてきた。そういえば先程も自分にマスターかどうかを聞いてきた事を思い出し玲霞はどう答えたらいいいのか迷った。マスターであると偽るのか、それとも生贄にされそうだったという事情を話すべきなのか。

考える事数秒。玲霞は決断した。

「私はマスターではないわ。彼に召喚の儀式の生贄にされる予定だった者よ。……私を助けて」

本心を告げる。玲霞はそれを選んだ。嘘をつくということを経験は考えなかつたわけではなかつた。けれど、相手に何かを伝えるためには自らの本心を伝えるということが必要だと、何もかもを失いそうになって自分の心の底からの願いを先程感じた、彼女だからこそその言葉だつた。

「ああ。君を助ける」

彼は彼女の言葉に即答した。それは事務的な返事だから早く返せたというわけではなかつた。サーヴァントだから。英霊だから。彼の本質は正義なのだ。彼のその言葉の重さだけで玲霞は心から安心することができた。

「それで何か勘違いしているから訂正するけど、俺のマスターは君だ」

玲霞はその言葉にいくつもの疑問を浮かべた。

「私は魔術師ではないし、令呪というものも持つてはいないのだけだ」

「たしかに、君には令呪はないし魔力供給もそこで気絶している彼からされている。でも、君の願いが聞こえた気がしたんだ。それで気がついたらここに召喚されていて、君が殺されそうになっていたから助けたというわけだ」

彼は現状を淡々と語っていく。

「では、あなたにもなんで召喚されたのかということとは分からないというわけなの？」

玲霞が一番不思議に思っていた事を尋ねた。

「そういうわけだね。俺が召喚されるというのはなかなか無いことだから何かしらの縁か力が働いているのは確かだとは思う」

結局、何故召喚されたのかは二人にはわからないということだけは分かった。

「まあ、俺の今までの知り合いやマスターはだいたい幸薄い女性だったから君の幸薄いという縁に導かれて来たのかもね」

彼は冗談のつもりで玲霞にそう言ったのかもしれないが、玲霞は幸薄いせいで死にかけたのでまったく笑えなかった。

彼はコホンと一つ咳払いを入れて言葉を繋げた。

「何はともあれ、君の声で召喚されたんだから君がマスターだ。魔力パスが通っている彼は何か邪悪な物を感じるしそんな人に手を貸したくは無いしね。俺の名前は怪盗キッド、これからよろしくマスター」

玲霞はそんな名前の歴史上の人物はいたかなと考えながら、自らも自己紹介する。

「私は六導 玲霞よ。不甲斐ないマスターだと思っけれどよろしく頼むわ」

第2話

キッドは未だ霊的パスが繋がっている相良の下まで歩く。相良の手にはサーヴァントのマスターの証である令呪が三画刻まれている。それをキッドは魔術で二画を自分に、一画を玲霞に移す。

「これが、令呪？」

「ああ、これが令呪。これで契約しているサーヴァントに対して絶対強制させることができる」

「自分に二画移したのはなぜなの？」

「サーヴァントは基本的にはマスターである魔術師から魔力提供されないと世界にとどまっておくことができないんだ。でも、マスターは魔術師じゃないから魔力がない」

「魔力は魔術回路があるものしか持っていないので玲霞にはキッドを世界にとどめておく事ができない。自らのせいでキッドに危機が迫っているので玲霞は少し慌てる。」

「じゃ、じゃあどうするのこれから。会ったばかりなのにすぐにさよならなんていうのは嫌よ私」

「英霊は人間霊に近い性質を持つから人の魂を食べることで一応、魔力の補充はできる」

「じゃあ、それでいきましよう」

さらっとグスイ発言をした玲霞に少しひきながらその発言にキッドは反対する。

「自分の為に誰かを犠牲にするなんてことは絶対にしたくない。ましてや、俺は既に死んでるんだ」

「でも、そうしないと貴方が……」

「俺のために言ってくれるのは嬉しいんだけど、誰かを殺すなんて簡単に言ってはダメだマスター。……それでなんとかする方法がこの令呪だ」

キッドは自らの令呪を指差しながら玲霞に見せる。

「令呪は膨大な魔力を内包している。使い方によつてはこんな事もできる」

「令呪を以て我が肉体に命ずる——玲霞を守り続けろ」

令呪は本人の抵抗がないおかげかしっかりと発動し、消えかけていたキッドは完全に現世に体をつなぎとめておくことに成功した。

本来ならこの命令をしたところで令呪分の魔力がなくなつてしまえば魔力供給を受けていないので最終的には消えてしまう。しかし、幸いなことに彼は単独行動のスキルを持つていたので日常では魔力をあまり使うことなく過ごすことができる。また、キッドお得意なルーン魔術には周りから魔力を集めるといふ魔術もあるので半永遠的に玲霞を守り続けることが可能になった。

キッドは続けて令呪を使う。

「重ねて令呪を以て我が肉体に命ずる——俺は玲霞を幸せにする」

「二回目の令呪の意味は分かるけど、二回目って使う必要あったかしら？」

玲霞はキッドの令呪の使用を見てふと疑問に感じたので言ってみる。

「そうだな。秘密」

キッドは何か含みのある言い方をするだけで詳しくは玲霞に教えてくれなかった。

「さて、コイツをどうしようかな」

相良を見ながら呟くキッド。

「きつと私はこの人のことを愛していたわ。魔術で印象操作していたとしてもその事実
は変わらない。でも、裏切ったのだから仕方ないわね。ごめんなさいね、貴方のことは、
大切な思い出にして生きていくわ」

キッドは狂気を孕んだ玲霞を見て心が痛くなる。どうしてこんな考えを持った人になっ
てしまったのか……。こういう風な考えを持つような周りの人間の行為にキッドは
怒りを感じる。だが、一旦それは心の奥に隠して玲霞を止める。

「さつきも言ったが人殺しはなしだ」

「でも、この人はきつと何人も人を実験の材料にしているわ」

「殺すなら俺がやる。でもマスターはダメだ。マスターには、玲霞にはこんな世界とは無関係で生きてほしい。それこそが玲霞が望む願いにも繋がる俺はそう思うよ」

今にも相良を殺しそうな玲霞の雰囲気が少し収まった。

「ねえ、キッドは人を殺した事があるの？」

不意に玲霞は尋ねる。

「普通の人間はない、かな。ゾンビやら動物やら掃除屋とかなら殺したことはあるけど生粋の人間はないな」

「そう。ならこの人を殺すのはやめておくれ」

突然の心の変化にキッドは軽く驚くものの殺さないという良い変化だったので深く問い詰めたりはしなかった。

第3話

「ルーマニアは行かない、これだけは必ず守ってくれないか」

キッドは手頃なホテルを玲霞にとつてもらい、その部屋で一息ついている時に突然告げた。

「聖杯戦争があるからかしら？」

「いや、聖杯大戦。通常の聖杯戦争とは呼ばれてるサーヴァントの数が違うからこう呼ばれている」

「でも、キッドは聖杯に望みがあつたからここに現界しているんじゃないの？」

呼ばれる英霊にはそれぞれの望みがある。望みを持たないのはルーラーくらいのものだ。しかし、キッドはアサシン。何かしらの望みがあると玲霞は瞬時に判断し、尋ねてみる。

「俺の望みにも聖杯は必要ないんだ。とある女性に逢いたい。俺の望みはそれだけだ。けど、会える可能性はかなり低いだろうな」

キッドはなにかを思い出すかのように少し上を見ながら玲霞に告げた。

「そう。なら、ルーマニアには行かないって約束するわ。わざわざ危ないところに行く

なんてしたくないもの」

聖杯戦争はサーヴァントだけが戦うというわけではない。マスターを殺せば、サーヴァントも現界し続けるところができず消滅するという理由からマスターを狙う作戦もある。玲霞は常人とは思えない程、思考速度などがずば抜けているが戦闘力自体は持っていない。

自分がいるものの、万が一がないとは言いきれなかった、キッドは聖杯戦争に参加しないと気づきつぱり言ってくれた玲霞に人知れず安堵した。

「じゃあ、これから私達はどうするの?」

「さあ?」

キッドは心底分らないようにそう言った。玲霞は驚きの表情を見せるが直に納得する。キッドはいろいろな助言などをくれるが、所詮はサーヴァント。玲霞の指示に従うということなのだろうと考え、先ほどの答えに理解したのは良いがこれからどうしようか玲霞は頭を抱えた。

玲霞の願いは死にたくないということ。しかし、それはあの時だものであつてずっとというわけではない。長期的にしたいことが玲霞にはなかった。

そんな玲霞の様子を見てキッドも理解したのだろう。一つの提案を玲霞にした。

「旅をしないか?」

「旅？」

「ああ、人は一人では生きていけない。必ず誰かしらと関わりを持つ事で生きています。それは、昔の俺も同じだ。とある人と会えた事で人生が豊かになった。だから玲霞にも出会いをするべきだと俺は思う。人と出会ったら何かやりたい事も見つかるんじゃないかな？」

玲霞はこれまで流されて生きてきた。流されるしかなかった状態にいたから仕方ない事だったがそこから、這い出てやろうという気概が玲霞にはなかった。

だが、今回たまたま自分で道を選ぶ機会に恵まれた。

玲霞はしっかりと考えた上で、決断した。

「それも悪くないかもね」

第4話

キッドと玲霞は旅をすることにしたが、玲霞が行き先をどこにするか迷っていたのでキッドは昔から行きたかった、京都へ行く事にした。

「これが新幹線かー。すごいなあ」

キッドは子供のように目を輝かせてじつくりと新幹線を見ていた。召喚されたサーヴァントは聖杯から知識としては現代の情報を得られるが実際に見るわけではないので、こうして生で見るとやはり感動する、とはキッドの談だ。

因みに、お金に関しては元手を玲霞に貸してもらい馬を競争させる賭け事でキッドが何倍にも増やした。玲霞は何で当たる馬が分かるのかをキッドに聞いて見たところ、逆に何で分からないのかが不思議だと言いつ返されて啞然とした。

京都に着いてからは比較的のんびりとしていた。

キッドが試食をするために歩き回り、玲霞がそれを見ながら着いて行くという事を繰り返す。

「キッドは食べるのが好きなのね」

お昼時になり、ベンチがある場所に座って休憩をしている時に玲霞がキッドに話しか

けた。

「嫌いではないけど、好きでもないかな？」

「じゃあ、何であんなに食べ歩いていたのよ。お陰で私はクタクタよ」

玲霞は元々運動などはあまりしていなかった為、午前中だけとはいえかなりの距離歩いていたので疲労困憊だった。

「ごめんごめん。いやさ、味を覚えていれば後で再現できるかなって思ってたね。食べさせたい人がいるんだ」

「それって、キッドがこの前言ってた出来れば会いたい人？」

「ああ、彼女食べるのが好きだったから」

キッドは空を見上げながら、微笑を浮かべる。そんなキッドを見てなんだか少しモヤモヤした気持ちに玲霞はなった。

「あれ？」

突然、キッドが何かを見て声を出した。玲霞もつられてキッドが見ているモノに目を向けた。そこには一人の女の子がキョロキョロと辺りを見渡していた。キッドは女の子が迷子だろうとあたりをつけ、彼女に近寄ろうとしたが立ち止まった。

「玲霞、あの子の所に行ってきてくれないか？」

玲霞はてつきり、お人好しそうなキッドが行くものだとばかり考えていて、何故自分が行かないといけないのかという視線をキッドに向けた。

「異性の大人が話しかけるより、玲霞みたいな母性溢れる人が行った方が良いかなと思つて」

「それでも何で私なの？」

「子供と触れ合うのも玲霞には必要な事だと思ふからかな？」

あやふやなキッドの答えだったが、迷子になつている女の子を放つておくわけにもいかなかったので玲霞は女の子に近寄つた。

玲霞は膝をおり、女の子と同じ目線になつて話しかけた。

「大丈夫？ お母さんかお父さんはどうしたの？」

「ママもパパもいなくなつちやつて……」

女の子はそれだけ言うと、玲霞の胸に抱きついて泣き始めてしまった。玲霞はあたたかとしながらも、女の子の頭を撫でてあげる。キッドはそれを見ながら謎の領きをして、それを見た玲霞は若干怒りを感じながらキッドに助けを求めた。

「とりあえず、落ち着くまでそうしてあげてればいいんじゃないかな？」

◇

泣いて感情を吐き出した少女は少し落ち着いたのか、目をゴシゴシしながら一人で両

親を探しに行こうとしたが、一人で行かせるのは不安がありすぎるのでキッドと玲霞も一緒にいて行く事にした。

二人の間に少女が入って、少女がそれぞれの手を繋いだ。まだ小学生にもなっていないような歳の女の子だ。不安だったのだろう。玲霞は優しく女の子の手を握り返し、キッドは痛くならないようにでも安心出来るように力強く握った。

少女はキッドと玲霞の顔を見ると、満面の笑みを浮かべて歩き出した。